投

37
271

エト4G-6 37-291

鴨

イプセン作

大正
2. 3. 4
内交

鴨

ヘンリック・イブセン著
森田草平譯

人物

ヱルレエ。紳商、工業家。
グレーゲルス　ヱルレエ。其息子。
老エークダル。
ヤルマア　エークダル。其息子、寫眞師。
ギイナ　エークダル。ヤルマアの妻。
ヘードキッヒ。右二人の娘、十四歳。
ゼールビイ夫人。ヱルレエ家の取締。
レリング。醫者。
モルヰック。元の神學生。

グローベルク。ヱルレエ家の會計。
ペッテルゼン。ヱルレエ家の從僕。
エンセン。日傭ひの給仕人。
痩せた紳士。
髪の薄い紳士。
其他ヱルレエ家の宴會へ招かれた紳士數名。
日傭ひの給仕人數名。

第一幕はヱルレエ家にて、他の四幕はヤルマア　エークダルの家に起る。

第一幕

ゼルレエの住宅

立派に飾立てた坐心地の好い書齋、書棚其他の室内裝飾品、室の中央に紙と書類とを載せた寫字檯、緣色の笠を被せた數個の洋燈がぼんやりした光を投げて居る。背景には、引絞つた帷幄を持てる二枚戸が開いて、其中に數個の洋燈と燭臺とで照された大きな華麗な室が見える。前面書齋の右手よりは、小さな毛氈を張つた戸に依てゼルレエの事務所へつゞく。左手には、石炭の火の眞赤に熾つた暖爐が在つて、それより後方へ下つた所に又二枚戸があつて、食堂へつゞく。

ゼルレエ家の從僕ペッテルゼン、揃ひの仕着、日傭ひの給仕エンセン、黑の着附、共に書齋を取片附けて居る。大きな室には、二三人の他の日傭ひの給仕が物を片附けたり、燭臺を點火したりしながら、彼方此方動いて居る。食堂からは、ぶつ〳〵云ふ話聲や大勢の笑聲が聞える。洋盃が小刀で叩かれると、沈默が續く。と、祝盃が提言される、「萬歲」の歡聲。やがて又ぶつ〳〵云ふ會話の聲。

ペッテルゼン（暖爐の上の洋燈を點火して、それに笠を覆せる。）おい一寸聽けや、エンゼン、今老爺が立つて長い演說を遣つてるからさ。うむ、ゼールビイ夫人の健康を祝してよ。

エンセン（安樂椅子を前へ押遣りながら）彼奴等二人は何だか譯があるつて云ふが、本當かね。

ペッテルゼン　知らないね。

エンセン　あの老爺さん、あれで若い時から繼樓ッ買ひで仕樣がなかつたと云ふ事たぜ。

ペッテルゼン　そりや有つたかも知れんね。

エンセン　今日の御馳走は老爺さんの息子の祝ひだと云ふが、左樣かな。

ペッテルゼン　左樣さ。其息子は昨日歸つて來たばかりよ。

エンセン　へえ、そりや始めて聞いたが、ゼルレエの旦那にそんな息子が

有るのかい。

ペッテルゼン　有るとも、立派な息子が有らあね。だが、其息子てえのは始終中へエダルの仕事場へ行つて居てね。俺が此家へ來てから幾年にも成るが、一度だつて町へ出て來たことはないのさ。

一人の給仕　（他の室の戸口に立つて、）もしペッテルゼンさん、今此の爺さんが――

ペッテルゼン　（呟く。）なに――今頃誰だい。

老エークダル右手より奥の室に現はる。毛の擦切れた高い襟の外套を着て、手には毛絲の指無手袋を穿め、杖と毛皮帽とを持つて居る。腕の下に褐色の紙包を挾む。汚れた赤褐色の髪と小さな灰色の上髭。

ペッテルゼン　（其爺さんの方へ進む。）如何したんだ――お前さん、此處に何用が有るんです。

エークダル　（戸口に立つて、）一寸事務所へ行きたいのだがね。

ペッテルゼン　事務所は二時間も前に閉つたんですよ、それに――

エークダル　そりや玄關でも左樣言はれたんだが、グローベルクは未だ其處に居るんだらう。ペッテルゼンや、お前好い人だから、窃と此處から通してお呉れよ。（と、毛氈の戸を指す。）俺や前にも此道から通つたことが有るんだよ。

ペッテルゼン　ぢや、通んねえな。（と、戸を開く。）だが、又元の道から出て行つて呉れねえぢや困るよ。お客樣が有るんだからね。

エークダル　分つてるよ――ふむ。有難う、ペッテルゼンや、眞個友達甲斐が有るね。有難う！（そつと呟く。）馬鹿め！（と、事務所へ行く。後からペッテルゼンが戸を閉める。）

エンセン　あれも事務所の役員かね。

ペッテルゼン　なに、あれや只外に居て、詰らない書物か何かさせて貰つてるのよ。だが、あれで昔や立派な旦那衆だつたんだからね、老エークダルと云つてね。

エンセン　ぢや、あの人もいろ〳〵な目を見て來たんだね。

ペッテルゼン　左樣さ、あれで一頃は陸軍士官だつたものよ。

エンセン　へえ、あれがかい。

ペッテルゼン　眞個なんだよ。だが、後ぢや材木屋だつたか何だか、そんな樣な商賣を押始めてね、人の話ぢや、隨分腹の惡い事をして、自宅の旦那にも損が掛けてあると云ふことだがね。なにさ、其時分はヘエダルの仕事場を仲間で遣つて居たのさ。左樣言や、俺もあの爺さんは好く知つてるのよ。好く二人でエリクゼンの主婦さん許へ押掛けて、苦麥酒や濁酒の瓶を倒したもんだな。

エンセン　あの爺さんにそんな金子は有り相もないぜ。

ペッテルゼン　何言つてるんだな、お前、そりや悉皆俺が拂つたのよ。俺アこれで落零れた人間にや些たア好くして遣るもんだと云ふこと位、平生から心得てるんだからね。

エンセン　ぢや、あの爺さん、其時身代限りでもしたんだね。

ペッテルゼン　いや、最と不可ないのさ。あの爺さん監獄へ入つたのよ。

エンセン　監獄！

ペッテルゼン　でなけりや、懲治檻だつかも知れんが——（耳を欹つ。）おい靜に、御馳走が濟んだやうだぜ。

食堂の戸は二人の給仕に依て內側から開かる。ゼールビイ夫人は二人の紳士と話しながら出て來る。だん〳〵全出席者がそれに續く、其中にゼルレエもあり、最後にヤルマア　エークダルとグレーダルス　ゼルレエの兩人來る。

ゼールビイ夫人　（前を過ぎながら、家僕に向って、）ペッテルゼンや、音樂室で皆さんに咖啡を上げてお呉れよ。

ペッテルゼン　はい、畏まりました。

夫人は二人の紳士と共に奥の室に行き、其處よりして更に右手に出づ。ペッテルゼンとエンセンと同じ道を出て行く。

一人の痞せた紳士　（頭の毛の薄い紳士に向って、）如何だい——今夜の宴會は。宛然一仕事だね。

頭の毛の薄い紳士　左樣さ、人間も其積りにさへ成りや、三時間の中には天下を驚かすやうな事業でも出來るからね。

痞せた紳士　まア後に〳〵。

第三の紳士　咖啡と櫻酒とが音樂室で出るさうですぜ。

痞せた紳士　そいつは有難い。それにゼールビイ夫人が何か演るでせう

よ。

頭の毛の薄い紳士　（小聲に、）但しゼールビイ夫人が彼の可厭な曲を彈いて呉れなきや尙更有難いがね。

痞せた紳士　あゝいや、あの女は決してそんな事は爲まい。ベルタも昔からの友達に嫌はれたくはなからうぢやないか。

皆々笑ふ。打連れて奥の室へ入る。

ゼルレエ　（沈んだ顏附をしながら、低い聲で、）グレーゲルスや、俺や誰も氣が附かなかつたとは思ふがね。

グレーゲルス　（父の顏を眺めて、）何ですか、そりや。

ゼルレエ　お前も氣が附かなかつたのかい。

グレーゲルス　一體何の事です。

ゼルレエ　それ、食卓に着いたのは十三人ぢやつたらうが。

グレーゲルス　成程！　十三人でしたかな。

ヱルレエ　（ヤルマア　エークダルの方をぢろりと見て、）平常のお客は十二人だがな。（他の人々に向つて、）皆さん、何卒此方へ。（ヱルルエを始めとして、ヤルマアとグレーゲルスを除く外、他の客はすべて舞臺後方より右手へ出て行く。）

ヤルマア　（前の會話を小耳に挾んだので、）グレーゲルス君、君は僕を招んぢや惡かつたんだね。

グレーゲルス　何だつて！　僕の唯一の親友を僕の爲に開かれたと云ふ會へ招ばずに置けと云ふのかい——

ヤルマア　併し阿父さんはそれを喜んで居られないのだらう。僕は一度も此家へ招待されたことはないのだからね。

グレーゲルス　そりや僕も聞いた。が、何しろ僕は君に會つて談話が爲たかつんだよ。僕も直き立つて行かなきや成らんのだからね。え、お互に學

校以來隨分長い間別れ〳〵に暮したぢやないか。あれから最う十六七年にも成るぜ。

ヤルマア　そんなに成るかねえ。

グレーゲルス　左樣成るよ。で、如何だい、君の近狀は？　見たところ、却々立派だぜ。强壯にも成つたし、何處か堂々たるものが有るよ。

ヤルマア　まさか「堂々」としても居まいがね。併し彼の時分から見ると、些たア男らしく成つたとは自分でも思つてるよ。

グレーゲルス　實際左樣だとも。外から見たんぢや申分なしだね。

ヤルマア　（曇つた調子で、）併し內と外とは違ふからね。眞個左樣したもんだよ。君も聞いて居るだらうね、二人が別れて以來、僕の一家の上に降りかゝつた不幸に就いちや。

グレーゲルス　（やゝ小聲に成つて、）君の阿父さんは今如何して見えるんだ

い？

ヤルマア　ま、其話はしないで呉れ玉へ。勿論僕の親爺は僕と一緒に居るさ。僕の外に親爺の面倒を見て遣る者は此世にないからね。だが、そりや僕に取つては話をするのも、隨分辛い問題だよ。え、解つてるだらう。それよりも、君は山で如何して居たんだな？

グレーゲルス　僕か、僕はまア寂しいと言へば寂しいが、隨分愉快な生活をして來たよ。落着いて物を考へる暇も充分有つてね。此處へ來たまへ。お互にゆつくり話さうぢやないか。

先づ自分から暖爐の側の安樂椅子に腰を卸して、ヤルマアにも強ひて他のそれと並んだ椅子に坐らせる。

ヤルマア　（感情的に、）何の彼のと言ふものゝ、阿父さんの饗應に僕を招待して呉れたのは有難いよ。畢竟君が僕に對する反感を捨てゝ呉れた證據に

成るからね。

グレーゲルス　（驚いて、）僕が君に對する反感を――如何してそんな事を言ふんだい。

ヤルマア　以前には左樣だつたさ。

グレーゲルス　何時の以前に？

ヤルマア　大不幸の後さ。そりや君が反感を持つたのも無理はないよ。阿父さんはそれが爲に、彼の――彼の恐るべき事件の中へ最う一歩で捲込まれやうとしたんだからね。

グレーゲルス　何故それが君に對してそんなものを持つ理由に成るのかい。一體誰がそんな事を君に言つたんだ？

ヤルマア　そりやア僕は知つてるさ。君の阿父さんが自分で僕に左樣言つたんだからね。

グレーゲルス　（飛立つ。）親爺が？　あゝ成程。ふむ――で、何かい、君が僕に一度も音信をして呉れなかつたのは其爲かい――只の一度も。

ヤルマア　ま、左樣さ。

グレーゲルス　あの君が寫眞師に成らうと決心した時でも？

ヤルマア　阿父さんは何も君に言つて遣らない方が可いと仰有るからね。

グレーゲルス　（眞直に相手を見詰めながら、）成程々々、そりや親爺の言ふ方が正當かも知れん。が、それはそれとして、ヤルマア君、大體君は現在の地位に滿足して居るのかい。

ヤルマア　（小さな溜息を洩して、）左樣さな、滿足して居ると云へば居るんだね。別段不足を言ふところもないからね。最初はそりやア變挺にも思つたさ。僕に取つては丸切り新しい世界へ出たんだからね。尤もそればかりぢやない、あらゆる狀態が一變したのさ。親爺の取返し樣のない零落――それに伴ふ恥辱と不面目――ね、グレーゲルス君。

グレーゲルス　（感動して、）左樣々々、そりや解つてるよ。

ヤルマア　僕が學校を續けるなんてことは考へても見られなかつたのさ。五十錢だつて餘分の錢はなし、逆樣に借金は有り――主に君の阿父さんにだと思ふがね。

グレーゲルス　ふむ――

ヤルマア　だから左樣だらう。僕は此際從來の周圍の關係を一擲し去るが一番好い方法だと考へたのよ。特にそれを勸めたのは君の阿父さんで、それ以來いろ〳〵深いお世話をして下さるがね。

グレーゲルス　親爺がかい。

ヤルマア　左樣さ、君も知つてるだらう、知らないのか。僕が何處で寫眞術を學ぶ金子を獲たと思つて呉れ玉ふ？　それに技術室を造つて開業する

金子だね。總體ぢや却々大した金高に成るんだよ、君。

グレーゲルス　で、其金子を親爺が出したのか。

ヤルマア　左樣だ。君はそれを知らんのか。僕は又阿父さんから君の方へ言つて遣られたこととばかり思つて居たがね。

グレーゲルス　いや、自分が關係してると云ふやうなことは一言も。大方親爺は忘れたんだらう。僕等の音信は毎でも只用向ばかりなんだからね。で、それが本當に親爺なんだね——

ヤルマア　眞個左樣だよ。阿父さんはそれが世間へぱッとするのを好んで居られなかつたやうだが、阿父さんには違ひないよ。それに僕を結婚させる樣にして下すつたのも、矢張阿父さんだからね。君は——君はそれを知らないのかい。

グレーゲルス　いや、そりや全然聞かないよ。（相手の腕を捉へて振る。）だが

ヤルマア君、今夜の話を聞いて、僕は何の位嬉しいか知れないよ——又多少の後悔も有るがね。要するに、僕は親父に對して餘り不公平な判斷を下して居たやうな氣がするよ。これで見ると、親爺にも何處か善心が有るやうぢやないか。云つて見れば、先づ懺悔さね。

ヤルマア　懺悔だつて——？

グレーゲルス　左樣さ、そりや如何だつて可いがね。兎に角、親爺についてこんな話を聞くなア、僕は何の位嬉しいか知れないよ。——それから君は結婚したと云つたね。そいつは迚も僕には出來相もない事を遣つたぜ。で、夫婦中は好いのかい。

ヤルマア　いや、お蔭樣でね、家内は細君としちや、ま、理想的な女だよ。それに滿更教育がないと云ふ譯でもないからね。

グレーゲルス　（稍驚いて）そりやア左樣だらう。

ヤルマア　君も左様思ふだらう、人生は、それ自身が教育だからね。毎日僕とは顔を見合つて居るし――それに僕等は一二の立派な人士を知つて居るから、左様云ふ人が時々宅へ來て呉れるよ。君は最うギイナを見ても忘れて居るだらうね。

グレーゲルス　ギイナ？

ヤルマア　左様さ、君はあの女の名がギイナと云つたことを忘れたのかい。

グレーゲルス　誰の名だつたかね。僕は實際知らないよ――

ヤルマア　君はあの女が此家で使はれて居たことを想出さんのか。

グレーゲルス　（相手の顔を見る。）あのギイナ　ハンセンのことかい――？

ヤルマア　左様さ、其のギイナ　ハンセンだよ。

グレーゲルス　――あの、僕の母が長い間煩つて居た最後の一年間、家の

取締をして居た？

ヤルマア　左様、其通りだよ。だが君、僕が結婚したと云ふことは、阿父さんから君の方へ知らせが有つた筈だと思ふがね。

グレーゲルス　（立上つて、）左様、そりやそんな事を云つて來た樣にも思ふが、何うもあの女と云ふことは――（室の中を彼方此方歩きながら、）いや待ち給へ――結局――最少し考へて見るよ。元來親父は毎でも短い手紙しか書かない男だからね（椅子の腕木の上に半ば坐る。）で、ヤルマア君、これを一つ聞きたいがね――一體如何して君はギイナと知己に成つたんだい――君の細君とさ。

ヤルマア　そりやア何でもないのさ。ギイナは此家にや餘り長く居なかつたのよ。其時分此家は阿母さんの病氣やら何やらで、いろ〳〵取込んで居てね、ギイナも遣切れないもんだから、左様言つて暇を貰つたのさ。それ

が阿母さんの亡く成つた一年前だと思ふがね――いや、同じ年かも知れんよ。

グレーゲルス　同じ年だ。其時僕は最う山の仕事場へ行つて居たよ。で、其後は？

ヤルマア　それからギイナは自宅へ歸つて、一年許り阿母と一緒に居たさ。ハンセン夫人と云つて、小ぽけな喰物店を開いて居たが、却々しつかりした好く働く女でね。これが一間明いてる室を人に貸さうと云ふんだ。一寸清麗な坐心地の好い室よ。

グレーゲルス　それを君が旨く借込んだと云ふ譯だね。

ヤルマア　うむ、それも君の阿父さんが周旋して下すつてね。ま、僕が實際ギイナと懇意に成つたのは、そんな樣な譯だよ。

グレーゲルス　で、それから君達は婚約をしたんだね。

ヤルマア　左樣だ。若い者を二人寄せて置けば、左樣成るのは當然だからね。ふむ――

グレーゲルス　（立上つて、幾度も彼方此方動く。）ぢや、訊くがね。僕の親父が何したのは――つまり、其の何だね、君が寫眞術を始めたのは、それからなんだね――君達が婚約をした後なんだね。

ヤルマア　左樣、眞個左樣だよ。僕は出來るだけ早く成功して、家を持ちたいと思つたもんだからね。それには寫眞屋を開業するのが一番手ッ取り早からうと、阿父さんも言はれるし、僕も思つたのさ。又、ギイナも左樣云ふ考へでね。あゝ、それには又斯う云ふ好都合な事情も有つたんだよ。君は知つてるか知らないが、ギイナがあれで寫眞の修整をすることをおぼえて居てね。

グレーゲルス　そりやア不思議に旨く打つかつたもんだね。

ヤルマア　（嬉し相に立上つて、）左様よ。それやァ眞個不思議だつたよ。え？

グレーゲルス　うむ、眞個だね。すると、僕の親父は君の爲にや殆ど天命を司つた様に見えるぢやないか。

ヤルマア　（感動して、）いや、阿父さんは友人の子が貧乏に成つてからも見捨ずに世話をして下すつたんだ。眞個善い方だよ、ね。

ゼールビイ夫人　（老エルレエの腕に凭りながら入り來る。）最う行つちや不可ませんよ。あんな所に、何時迄も燈火を見詰めたまんま、坐つてらしては不可ないんですよ。貴方には好く有りませんからね。

エルレエ　（夫人の腕を離して、其手で眼を擦りながら、）そりや、お前さんの言ふ通りだがね。

ペツテルゼンとエンセンの二人果物の皿を運ぶ。

ゼールビイ夫人　（他の室に居る客に向つて、）貴君方、何卒此方へ。ポンスを召

上る方は此方へ來て頂きます。

痩せた紳士　（ゼールビイ夫人の側へ遣つて來て、）貴方はわれ〳〵一同大贊成の喫煙の自由を中止されたと云ふが、まさか本當ぢや有りますまいね。

ゼールビイ夫人　いえ、エルレエの宅では、何卒お煙草は召上らない様に願ひます。

髪の薄い紳士　一體何時からですか、そんな嚴しい法律の修正が成立したのは？

ゼールビイ夫人　つい此前の宴會からですよ。あの時は皆さんの中に隨分この目標を超えて平氣で居る方が有りましたからね。

髪の薄い紳士　だつて、些いと位其目標を越したつて可いぢや有りませんか、ねえベルタさん。ほんの些いとです。

ゼールビイ夫人　いえ、幾許些いとでも不可ません。

客の多くは書齊へ集つて來た。召仕どもはポンスの盃を渡して廻る。

ゼルレエ（机の側に立つて居るヤルマアに向つて、）エークダル君、君は其處で何を研究して居るんだね。

ヤルマア　なに、只寫眞帖（アルバム）を拜見して居るんです。

髮の薄い紳士　なに、寫眞帖だ？　有繋に職業柄ですね。

痩せた紳士（安樂椅子に腰掛けて居て、）君は自分で寫したのを持つてお坐（いで）ぢやないか。

ヤルマア　いえ、持つて參りません。

痩せた紳士　そりやア持つて來る所だつたね。繪を見るのは、これで消化に好いものだよ。

髮の薄い紳士　それに、矢張（やつぱり）それが饗應の一つに成るからね。え、左樣だらう。

近眼の紳士　いや、左樣云ふ饗應は大いに歡迎するよ。

ゼールピイ夫人　エークダルさん、皆さんの仰有（おつしや）るのは、折角御馳走に招ばれたら、御馳走だけの事は爲（し）て返さなくちや不可まいと云ふことなんですよ。

痩せた紳士　御馳走が好けりや、それに對する義務も從つて愉快に盡されると云ふもんだね。

髮の薄い紳士　殊にそれが生活上の努力に關する問題であつて見れば、勿論だね。

ゼールピイ夫人　眞個皆さんの仰有る通りですよ。

皆笑つたり冗談を言つたりしながら會話をつゞけて行く。

グレーゲルス（小聲で、）君も何か言はなきや不可（いか）んよ。

ヤルマア（身を悶へながら、）何を話したら可からうね。

痩せた紳士　如何でせう、ゼルレエさん、此のトーケエと云ふ葡萄酒は比較的有効な飲料だと思ひますが――尤も、私や藥學上の見地から云ふんですがね。

ゼルレエ　（暖爐の傍で、）今日お飲みに成つた葡萄酒だけは、兎に角保證致しますよ。あれで一番時候の好い時に造つたものですからね。勿論お氣附のことゝは思ひますが――

痩せツこけた紳士　いや、如何して、却々好い香味を有つて居ましたよ。

ヤルマア　（おゝ〳〵、）時候によつて相違が有るものでせうか。

痩せた紳士　（笑ふ。）何だ？　君は旨いことを言ふね。

ゼルレエ　（微笑して、）君なぞに好い酒を振舞ふのは眞個引合はないよ。

髪の薄い紳士　トーケエ酒は君、寫眞の樣なものだよ。矢張日光が要るからね。え、左樣ぢやないのか。

ヤルマア　左樣です、そりや大部分日光の問題です。

ゼールビイ夫人　ですが、侍從だつて同じ事ぢや有りませんか。ね、そら矢張日光が必要なんでせう。（註曰、朝廷の御お（ぼえと云ふ日光。）

髪の薄い紳士　何だ黴の生えた洒落ですね。

近眼の紳士　ゼールビイさんが又何か言ひますよ。

痩せた紳士　――僕等を犧牲にしてかね。（夫人を威嚇しながら、）あゝ、何うもベルタさんには敵はない。

ゼールビイ夫人　左樣ですよ、時候によつて大へん違ふことは最う間違ひツこ有りませんね。如何しても古い葡萄酒が一番好いんですよ。

近眼の紳士　で、私は古い方の仲間ですかね。

ゼールビイ夫人　如何いたしまして、それ所ぢや有りませんよ。

髪の薄い紳士　君なんざ何うせ左樣だよ。併し僕は――ゼールビイさん。

痩せた紳士　僕は如何です。僕は何んな時候に屬して居るんですか。

ゼールビイ夫人　皆さん好い時候に屬して被坐しやると思ひますわ。（と、ポンスの盃を啜る。紳士どもは笑つたり、夫人にじやらついたりする。）

ヱルレエ　ゼールビイさんは旨く逃げることを知つて居るからね――何時でも逃げやうと思へば。諸君、何卒盃を乾して下さい。ペッテルゼンや、注いで廻らないか。グレーゲルスや、如何だい、一杯の酒を二人して飲まうぢやないか。（グレーゲルスは動かない。）エークダル君、君も仲間に成らんか。何うも君とは一緒に飲む機會がなかつたね。

會計のグローベルクが毛氈戸越しに覗き込む。

グローベルク　御免下さい、何うも出て行かれないもんですから――

ヱルレエ　又閉籠められたのかい。

グローベルク　えゝ、フラクスタッドの奴が鍵を持つて何處かへ行つて仕

舞ひましたもんですからね。

ヱルレエ　それぢや此處から出て行くが可い。

グローベルヒ　ですが、他に最一人居りますので――

ヱルレエ　なに構はない、二人とも此處を通るが可い。怖がることはないよ。

グローベルクと老エークダルの兩人事務所より出で來る。

ヱルレエ　（思はず知らず、）おゝ。

客の中の笑聲止む。ヤルマアは父親の姿を見て縮み上り、盃を下に置いて、暖爐の方へ向く。

エークダル　（上を見ずして、口の中で物を言ひながら、通る時に右左へ頭を下げる。）御免下さい、何うも飛んだお邪魔を致します。戸が閉つたもんですから――戸が。何卒御免下さい。

彼とグローベルクの兩人舞臺後方よりして右手へ出て行く。

ゼルレエ　（齒を嚙み緊めながら、）グローベルクの畜生！

グレーゲルス　（口を開いて見送りながら、ヤルマアに、）あれは確に――ぢやないのか。

痩せた紳士　何ですか。ありや誰ですか。

グレーゲルス　いや、誰でも有りません、只自宅の會計が誰か連立つて來たので――

近眼の紳士　（ヤルマアに向つて、）貴方あの人を御存じですか。

ヤルマア　いえ、知りません――氣が附きませんでした――

痩せた紳士　一體何事ですか。

と、小聲で話して居る他の連中の傍へ行く。

ゼールビイ夫人　（召使に囁く。）外であの人に何か遣つてお呉れ――何かね、可いかい。

ペッテルゼン　（點頭く。）見て參りませう。（出て行く。）

グレーゲルス　（感動した小聲で、ヤルマアに向つて、）實際あの人だつたかね。

ヤルマア　左樣だよ。

グレーゲルス　それだのに君は其處に立つて居て、知らないと言つたんだね？

ヤルマア　（激した聲で囁く、）併し僕が如何して――

グレーゲルス　――阿父さんを認められないと云ふのか。

ヤルマア　（苦し相に、）あゝ、君が若し僕の地位に立つて見て呉れたら――

客の中の會話は低聲でつゞいて居たが、だん〳〵大きく成つて、無理に抑へたやうな喧噪に移る。

髮の薄い紳士　（懷かし相な樣子で、ヤルマアとグレーゲルスの側へ遣つて來て、）やア！大分學生時代の話が持てますね、え？エークダル君、煙草を喫まうぢ

やないか。燐寸を持つてませんか。いや、左樣々々、此處ぢや不可なかつたんだね——

ヤルマア　いえ、有難う、私は一向——

痩せた紳士　如何です、エークダル君、一つ短い詩でも吟じませんか。君は好く美い聲をして吟じよつたもんだぜ。

ヤルマア　いや最う、近頃は一つもおぼえて居ませんから。

痩せた紳士　左樣か、そりや詰らないね。如何だい、バーレ君、如何しやうかね。

二人の紳士は去つて他の室へ行く。

ヤルマア　（沈んだ語氣で、）グレーゲルス君、僕は最うお暇しますよ。人間も一度運命の手で頭を抑へられた者は、え、左樣ぢやないか——何卒阿父さんに宜しく言つて呉れ玉へ。

グレーゲルス　あゝ可いよ、左樣言つて置くよ。君は眞直に自宅へ歸るだらうね。

ヤルマア　あゝ。何故？

グレーゲルス　うむ、若一としたら後で君の許へ行つて見やうかと思つて——

ヤルマア　いや、そりや不可ないよ。君は來て呉れない方が可いよ。僕の今居る家と云つたら、そりやア汚くろしいしみッたれた家だからね。特にかう云ふ立派な宴會の後ぢや堪らないよ。これからは毎も何處か町の中で會ふことに爲やうぢやないか。

ゼールビイ夫人　（こつそり傍へ來て居て、）エークダルさん、最うお歸りですか。

ヤルマア　最うお暇します。

ゼールビイ夫人　ギイナさんに宜しく。

ヤルマア　有難う。

ゼールビイ夫人　それから、私も其間お伺ひすると仰有つて下さい。

ヤルマア　えゝ有難う。（グレーゲルスに向つて、）送つて呉れたまふな、僕はこつそり誰にも氣附かれぬ様に出て行くから——

と、ぶら〳〵他の室へ行き、更に右手へ出て行く。

ゼールビイ夫人（小聲で、戻つて來た召使に向つて、）あゝ、老爺に何か遣つてお呉れかへ。

ペッテルゼン　えゝ、コニャックを一瓶持たせて歸しました。

ゼールビイ夫人　まア、何か最つと好い物を上げてお呉れだと可いのにねえ。

ペッテルゼン　ですが、ゼールビイさん、コニャックは、彼の爺さん、何よりも大好物ですぜ。

痩せた紳士（手に一枚の樂譜を持ちながら、戸口に立つて、）ゼールビイ夫人何か一つ短いものを遣つて下さいませんか。

ゼールビイ夫人　左様ですね、何か遣りませうよ。

客ども　賛成、大賛成。

夫人は客と共に後方の室を通つて、右手へ出て行く。グレーゲルス後に殘つて、暖爐の傍に立つて居る。ゼルレエは寫字檯の前に坐つて、何か見て居たが、グレーゲルスの去らんことを願ふ様に見えた。いよ〳〵グレーゲルスの動かぬのを見て、立つて戸の方へ行く。

グレーゲルス　阿父さん、一寸待つて下さらんか。

ゼルレエ（立停まる。）何か用かい。

グレーゲルス　一寸貴方にお話したいことが有りますから——

ゼルレエ　皆お歸りに成る迄待たれないかい——二人限りに成る迄。

グレーゲルス　いえ、待たれません。何うも二人限りに成るやうなことは

永久無いでせうからね。

ゼルレエ　（側へ來て、）一體何だい？

次の對話の間、ピアノの音が遠くの音樂室より聞ゆ。

グレーゲルス　彼の家族はあんな酷い零落れ樣をしても可いんですか。

ゼルレエ　お前はエークダル一家のことを云つてるんだね。

グレーゲルス　左樣です、エークダル一家のことです。エークダル中尉と貴方とは、一時あれ程密接な關係が有つたぢや有りませんか。

ゼルレエ　いや、惡い事には、それが餘り密接過ぎたんだね。俺はそれが爲に長い間何の位可厭な思ひをして來たか知れないよ。俺が、左樣だ、此の俺が體面上世間から兎や角言はれるのも、眞個彼の男の爲なんだからね。

グレーゲルス　（小聲で、）貴方は彼の人一人が惡い樣に仰有るんですね。

ゼルレエ　其外に誰が惡いと云ふんだい？

グレーゲルス　彼の山林の件については、貴方も彼の人と一緒にお遣りに成つた——

ゼルレエ　だが、あの山林の圖を引いたのは彼の男ぢやないか——あの欺罔の地圖をね。官有地の樹木を不法に伐り倒したのも彼の男ぢやつた。事實上、一切の取引は彼の男の手に有つたのだからね、俺はエークダル中尉が何を爲て居たのか、全く知らなかつたのだよ。

グレーゲルス　中尉自身も何を爲て居たのか、一向知らなかつた樣ぢや有りませんか。

ゼルレエ　そりやア左樣かも知れん。併し事實は矢張彼の男が有罪と判決され、俺は免訴に成つたのだからね。

グレーゲルス　そりや勿論貴方に不利な證據が一つも上らなかつたこと

は、私も知つて居ます。

ゲルレエ　免訴は免訴さ。何故又お前は俺の頭を時ならずして白くしたやうな、古い災難を今更荒立てるんだい。お前が彼方で長年の間考へて居たのは、そんな事なのかい。グレーゲルスや、俺はお前に言つて置くがね、此町ぢやそんな話は最う疾くの昔に忘られて仕舞つたんだよ——少くとも俺に關したことはね。

グレーゲルス　ですが、彼の不幸なエークダル一家は——

ゲルレエ　お前は彼奴等に對して、俺が如何して遣つたら可いと云ふんだね。エークダルが牢から出た來た時は、最う全然廢人に成つて、何の役にも立たなかつたんだよ。世の中には、彈丸の二つも身に受けると、其儘どん底へ沈んで、二度と浮び上らない人間も有るんだからね。グレーゲルスや、お前もこれだけは俺の言葉を信用しても可いよ、俺は直接俺自身を表

に出さない限り、詰らない嫌疑や噂の種を蒔かない限りに於て、出來るだけの事はして居るんだよ。

グレーゲルス　嫌疑ですつて——？　いや、解りました。

ゲルレエ　俺は事務所の寫物をエークダルに爲せとるが、そりや仕事の値打よりはずつと好い賃銀を拂つて居るんだよ。

グレーゲルス（相手の顏を見ずして、）ふむ、そりや左樣でせうよ。

ゲルレエ　何故笑ふんだい。お前は俺を疑ふんだね。さ、俺も帳簿を見せて證明を立てる譯にも行かんが——毎もそんな拂ひは記入して置かんからね。

グレーゲルス（冷やかに微笑む。）そりや帳簿に載せて置かん方が可い拂ひも隨分有りませうよ。

ゲルレエ（飛立つ。）何だ、そりやア何を言ふんだい？

グレーゲルス（勇氣を鼓して、）いえ、貴方はヤルマア　エークダルに寫眞術を學ばせた費用を帳簿に記入して置かれたかと訊くんです。

ゼルレエ　俺が？　如何して俺がそれを記入するんだい？

グレーゲルス　私は其費用をお拂ひに成つたのは貴方だと云ふことを聞きました。而も彼の男に家を持たせてお遣りに成つたのも貴方だと云ふことを聞きました。

ゼルレエ　それでも、お前は未だ俺がエークダル一家に對して何も爲て遣らないと云ふのかい。俺は良心に誓つて言ふがね、彼の家の者ぢや俺も隨分金子を使つたよ。

グレーゲルス　貴方は其費用を一つでも帳簿へ御記入に成つたんですか。

ゼルレエ　何故そんな事を訊くんだい？

グレーゲルス　えゝ、私には私だけの理由が有るんです。では伺ひますが

ね、貴方が友人の息子をそれ程親切にして遣らうと思ひ立たれたのは何時ですか――彼の男が結婚する樣に成つてからぢや有りませんか。

ゼルレエ　何故だい、俺が如何して――これ程年數が經つてから、如何してそんな事を――

グレーゲルス　あの時分貴方は私に手紙を下さいましたね――勿論事務上の手紙でした。あの追伸云々の中に――ヤルマー　エークダルがハンセンと云ふ娘と結婚したと書いて有りましたね？

ゼルレエ　左樣ぢや、眞個其通りぢや。それが彼の娘の苗字ぢやからね。

グレーゲルス　併し其のハンセンと云ふ娘が元宅の取締をして居たギイナハンセンだと云ふことは私に仰有いませんでしたね。

ゼルレエ（無理に嘲笑を裝ひながら、）成程、お前がそれ程元の取締に對して興味を有つて居やうとは氣が附かなかつたね――本當によ。

グレーゲルス　そりや私ぢやアない。併し（と、聲を低めて、）此家には未だ他に彼の娘に對して特別の興味を有つて居た方が有りましたよ。

ゼルレエ　何を言ふんだ、お前は？（急に怒りを發しながら、）まさか俺の事を言つてるんぢやなからうね。

グレーゲルス（小聲ではあるが、斷乎として、）左樣です、貴方の事を言つてるんです。

ゼルレエ　お前はそんな事を――そんな事を邪推するんだね！　彼奴が又――あの恩知らずの畜生めが――寫眞屋の野郎めが――能くもそんな事を話しやアがつたな。

グレーゲルス　ヤルマアは一言も言やアしません。彼の男はこんな事夢にも知らないでせうよ。

ゼルレエ　ぢや、何處から聞いたんだい？　誰がそんな事をお前に告げた

んだい？

グレーゲルス　私の阿母さんですよ。最後に會つた時、あの可憫相な阿母さんが私に言ひました。

ゼルレエ　お前の母だ　そりやア俺も氣が附かなかつた。成程、お前達は毎も共同に成つて居たからね。お前を最初私に逆らはせる樣にしたのも彼の女だつたよ。

グレーゲルス　いえ、それは阿母さんが此家で悐えて居なすつた苦勞ですよ。あんな憫れな身體に成つて、到頭死んで行かれる迄、靜乎と悐えて居なすつたあの苦勞を見るに忍びなく成つたのですよ。

ゼルレエ　なに、彼奴が苦勞なんか爲るものか。縱しんば爲た所で、そりや大抵の女には有勝ちのことさ。だが、頭のひねくれた神經の强い女と云ふものは、如何にも仕樣のないものだからね。俺も彼女には眞個弱らせられ

たよ。で、何かい、お前はそんな疑惑を抱いて遣つて來たんだね――現在親の身にかゝつたそんな風評や蔭言にばかり身を入れて居るんだね。グレーゲルスや、俺はお前に言つて置くがね、お前の年頃ぢや最少し有益な事で何か爲べき事が有りやしないかい。俺は本當に左樣思ふよ。

グレーゲルス　左樣です、何か爲なけりや成らん時です。

ゲルレエ　左樣すりや、お前の心も今よりや快活に成るだらう。一體お前の氣が知れんね、來る年も〳〵、山の仕事場で普通の書記と一緒に成つて、並の月給より一錢だつて餘計なものは取らずに働いて居た處で、偖て如何成るんだい。宛然馬鹿の爲る事ちやないか。

グレーゲルス　えゝ、私も只あれだけが安心出來さへすりや。

ゲルレエ　お前の心は好く俺にや解つてるよ。お前は獨立したいと云ふんだらう、少しでも俺に義務を負ひたくないと。それには恰度今好い鹽梅に

お前が獨立して遣つて行かれるやうな機會が有るよ。うゝむ、何處から見ても誰にも負ふ所なしでよ。

グレーゲルス　一體如何云ふ事なんです。

ゲルレエ　お前に直樣町へ歸る樣に云つて遣つた時にだね、あの時――

グレーゲルス　えゝ、本當に如何云ふ御用なんですか。私は毎日それを伺ひたいと思つて待つて居るんですよ。

ゲルレエ　俺はお前に會社の仲間に成つて貰ひたいと思ふんだがね。

グレーゲルス　私が！　貴方の會社に？　仲間に成る？

ゲルレエ　左樣さ。何も左樣成つたからとて、二人が毎日一緒に居なくちや成らんと云ふ譯でもないんだよ。お前は此處で事務を執るが可い。俺は山へ行くからね。

グレーゲルス　貴方が、本當に？

ゼルレエ　本當だとも。俺も以前の樣には仕事が出來なく成つたからね。何うも少し眼の養生をしなきや成るまいと思ふんだよ。近頃餘程視力が衰へたのでね。

グレーゲルス　元から左樣ぢや有りませんか。

ゼルレエ　いや、今程ぢやない。それには又――俺が山へ出掛けた方が好いやうな事情も有るのでね――兎に角、一時でも。

グレーゲルス　左樣ですか、そんな事とは夢にも知りませんでした。

ゼルレエ　まア お聽きよ。お前と俺との間には、そりやいろ〳〵な思ひ違ひも有つて、一つの垣根が出來てるがね。併し何と言つても矢張親子ぢやないかね。して見りや、お互に談合ひの上で、何とか折合の着かんものでもなからうと思ふが、如何だね。

グレーゲルス　勿論、そりや表面だけでせう。

ゼルレエ　左樣、それだけでも可いやね。まア好く考へて見て呉れよ、グレーゲルスや。お前はそれが出來ると思はんのかい。

グレーゲルス　（冷やかに相手を見詰めながら、）此裏にや何か有るんでせう。

ゼルレエ　如何して左樣だい

グレーゲルス　何かで私を使はうと思つてるんですね。

ゼルレエ　親子の間柄だもの、お互に扶けられたり扶けたりするのは、こりや當前ぢやないか。

グレーゲルス　そりや、左樣言ひますね。

ゼルレエ　俺は暫らくの間お前に自宅に居て貰ひたいのだかね。グレーゲルスや、俺も寂しい人間だ。一生の間、毎も寂しい思ひをして暮して來たよ。殊に年を取つてからは尙更左樣だがね。誰か自分の傍に居て貰ひたいよ――

グレーゲルス　ゼ！ルビイ夫人が居るぢや有りませんか。

ゼルレエ　左様、彼の女が居て呉れる。云つて見りや、彼の女は最う俺には一日も無くて適はぬものに成つたがね。始終快活で氣分にむらは無し、ま、彼の女が此家を生き〳〵させて呉れるよ。俺にはそれが何よりだからね。

グレーゲルス　それぢや、貴方の思ふ存分で、何不足も無いぢや有りませんか。

ゼルレエ　それがさ、只長く續くまいと思つて心配するんだよ。女と云ふものは、左様成ると、得て世間で有らぬ名を立てられるものでね。左様云ふ事に成りや、男だつて決して好い譯のもんぢやないからね。

グレーゲルス　ですが、貴方の様に、かう云ふ宴會を成さる位ぢや、そんな事は最う關つて居られんのでせう。

ゼルレエ　左様さ、だが女はねえ、グレーゲルスや。俺は彼の女が長くそんな地位に甘んじて居まいと思つて、それを心配するんだよ。縱しんば彼の女が——俺に對する愛着からだね、縱しんば彼の女が世間の風評や蔭言を氣に懸けないとしても——？　お前は如何思ふ——お前だけの發達した見識を有つて——

グレーゲルス　（相手の言葉を遮つて、）何卒手取早く言つて下さい。貴方は彼の女と結婚しやうと思つて被坐しやるんですか。

ゼルレエ　假に俺が左様思つてるとして？　それで如何だい？

グレーゲルス　そりや私が言ふ事ですよ。それで如何です？

ゼルレエ　お前は飽迄それに反對する氣かい。

グレーゲルス　如何致しまして、決してそんな事は有りませんよ。

ゼルレエ　俺は又、お前が死んだ母親に對する敬虔の念からして——

グレーゲルス　私はそんな神經家ぢや有りませんからね。

ゼルレエ　いや、お前が何で有らうが無からうが、何れにしてもお前は俺の心から重い石を除つて呉れたよ。俺が此事件についてお前の同意を得たのは、實際嬉しいよ。

グレーゲルス　（凝乎と相手の顔を見詰めながら、）やつと貴方が私を利用しやうと思つた事が解りました。

ゼルレエ　お前を利用する？　それや何と云ふ言草だい！

グレーゲルス　言葉なぞ如何だつて可いぢや有りませんか――他人が聞いてる譯ぢや有りませんからね。（短く笑ふ。）成程！　それで私が自身町へ遣つて來なくちや成らなかつたのですね。ゼールビイ夫人のために、私どもは此家の中で家庭生活の眞似をして見せるんですね。親子の活人畫でさ。實際そりや新しいでせうよ。

ゼルレエ　如何してお前はそんな調子で俺に物を言ふんだい？

グレーゲルス　此家に嘗て家庭らしい生活が有りましたか。私が記憶する樣に成つてからは、斷じてない。だが、今に成つて貴方はそれが入用に成つたのでせう。成程、頭の白い親父が結婚すると聞いて、息子が親思ひの一念から、取る物も取敢ず、遽てゝ遣つて來たと世間へ觸れさせたら、そりや都合が好いでせうよ。左樣すりや、死んだ阿母さんを惡くしたと云ふやうな噂も後に殘らん譯ですからね。えゝ、これん計りだつて殘りませんとも。息子が一掃して呉れまさアね。

ゼルレエ　グレーゲルスや――お前は此世の中に俺程憎んでるものは無いのだね。

グレーゲルス　（低聲で、）私は餘り近くに居て貴方を見たものですからね。

ゼルレエ　いや、お前は母親の眼で私を見て居るんだ。（稍聲を低めて、）だが

の、彼女の眼も時々曇らされたと云ふことを考へて見ないぢや不可んよ。

グレーゲルス　（震へながら、）貴方の仰有ることは、私には解つてます。ですが、阿母さんに左様云ふ氣の毒な弱點が有つたとしても、そりや誰の罪です。皆貴方や彼の女どもの――！　最後の女は貴方が要らなく成つてから、ヤルマア　エークダルに押附けた彼の女です――えゝ！

ゼルレエ　（肩を聳かして、）一言一句、お前の阿母が言ふ通りだ！

グレーゲルス　（それには關はず、）それで今あの男は彼のどつしりした、疑ふ所のない、子供の様な心持で、何方を見ても瞞着の中に坐つて居るんです――そんな女と一緒に同じ屋根の下に住んで居るんです、而も自分の家庭と稱するものが虚僞の上に建てられて居ると云ふことも知らないで居る！（一歩側へ寄つて、）私は貴方の過去を振回つて見ると、到る所踏み躙られた犧牲に充ちて居る戰場を見るやうな氣がするんですよ。

ゼルレエ　何うもそれぢやお前と俺との間は、元通りには成らん様だね。

グレーゲルス　（やつと自分を制して、叩頭をしながら、）私も左様思ひますよ。ですから最う帽子を執つて出て行きます。

ゼルレエ　出て行く！　此家から？

グレーゲルス　左様です、私も到頭人生に於ける自分の使命を見附けました。

ゼルレエ　何だ、使命と云ふのは？

グレーゲルス　貴方に言つた所で、お笑ひに成るばかりですからね。

ゼルレエ　俺の様な寂しい人間は滅多に笑ふものぢやないよ。

グレーゲルス　（舞臺後方を指さしながら、）阿父さん、御覽なさい――侍從どもはゼールビイ夫人と目かくしをして遊んでますよ。左様なら――御機嫌好く。

と、後方より右手へ行く。遊びの仲間の面白さうな笑聲聞えて、外側の室に現る。

ヱルレエ（グレーゲルスの出て行つた後を目掛けて、さも輕蔑した樣に呟く。）はゝ——

——！ 馬鹿な奴だな。あれで自分ぢや神經家でないと言ふんだからね！

第二幕

ヤルマア エークダルの技術室

家の頂上に於ける可成大きな室。右手は半ば帷幄（カーテン）に蔽はれて、硝子板（ガラス）の傾斜した屋根が見える。後方、右手の隅に入口の戸、同じ側（がは）で最つと前へ出た所に、居間に通ずる戸。反對の側には、同じく對になつた二つの戸、其間に鐵の暖爐を据えてある。後方にはひろい二重の滑り戸がある。此技術室は質素ではあるが。坐心地よく造られ、家具も揃つて居る。右側の二つの戸の間、やゝ壁から離れた所に、長椅子と机に二三の椅子とが置いて有つて、机の上に火を點した洋燈、それには笠が被せてある。暖爐の傍に古い安樂椅子。いろ〳〵な寫眞の器械や裝置は室のところ〴〵に横たはつて居る。後方の壁に沿うて、二枚戸の左に、僅少の書籍、函、化學用品の瓶、器械、道具、其他の物を入れた本箱が置いてある。寫眞を始めとして、駱駝の毛の刷毛だの紙だのと云ふやうな、小さな物は机の上に載せてある。

ギイナ　エークダルは縫物をしながら、机の傍の椅子に坐る。ヘードヰツヒは兩手を

眼の上に翳して、拇指を耳に當がひ、讀書しながら長椅子に坐つて居る。

ギイナ（何か隱して居る心配でも有る樣に、一二度ヘード井ツヒの方を見遣つたが、やがて喚ぶ。）ヘードキツヒや。（ヘード井ツヒには聞えない。ギイナ更に聲を大きくして喚ぶ。）ヘードキツヒや。

ヘード井ツヒ　（手を離して見上げる。）何なの、阿母さん。

ギイナ　ヘードキツヒや、お前最うそんなに何時迄も本を讀んで居ちや不可ませんよ。

ヘード井ツヒ　だつて阿母さん、最う少し可いでせう？　ほんの最う少うし？

ギイナ　いゝえ、最う片附けなきや不可ません。又阿父樣に叱られますからね。阿父樣だつて晩はお讀みに成らないでせう。

ヘード井ツヒ　（本を閉ぢ。）だつて、阿父樣は本讀むことなぞは餘りお所好で

ないのだわ。

ギイナ　（縫物を傍に押遣つて、机の抽斗から鉛筆と小さな小遣帳とを取出す。）あれは幾許やらだつたね、今日牛酪屋に拂つたのは？　お前おぼえて居るかい。

ヘード井ツヒ　一クラウンと六十五ペンスよ。

ギイナ　あゝ左樣だつたね。（それを附ける。）此家で牛酪が幾許要るかと思ふと、本當に怖ろしいやうだよ。それから燻した臘腸だつたね、それに乾酪——斯うッと——（書附ける）——其外には火腿が有つたね——ふむ。（總〆をして）左樣、これで恰度何に成るんだね。

ヘード井ツヒ　未だ麥酒が有りましたよ。

ギイナ　左樣々々、それが有つたね。（書附ける。）まア隨分要ること！　だが、これより少なくちや遣つて行かれないわねえ。

ヘード井ツヒ　ですけれども、阿父樣が被坐しやらないから、お午飯には

阿母様も私も暖かい物は何も喫べなかつたぢや有りませんか。

ギイナ　あゝ、そりやアそれで可いんだよ。それに寫眞の代を八クラウンと五十ペンス受取つたからね。

ヘード井ツヒ　本當に！　そんなに澤山？

ギイナ　きちんと八クラウンと五十ペンスでしたよ。

沈默。ギイナ又縫物を取上げる。ヘード井ツヒは紙と鉛筆を持つて、左の手を眼の上に翳しながら、畫を描き始める。

ヘード井ツヒ　阿父様がゼルレエさんの樣な立派な宴會へ行つてらつしやるかと思ふと、嬉しいわねえ。

ギイナ　ゼルレエさんのお客と云ふ譯ぢやないよ。阿父樣の招ばれなすつたのは息子さんの方だからね。（一寸言葉を途切ちした後、）ゼルレエさんと自宅とは何の關係もないんだよ。

ヘード井ツヒ　早く阿父樣が歸つてらつしやると可いわねえ。あのゼールビイ夫人に賴んで、何か好い物を貰つて來て下さるんだつて——私、阿父樣とお約束がして有るんだもの。

ギイナ　そりア左樣だよ。彼處にはいろんな好い物が澤山有るからね。

ヘード井ツヒ　（つゞけて畫を描く。）それに私、何だかお腹が空いたやうだわ。

老エークダル腕の下に紙包を挾んで、上衣の衣囊にも最一つ紙包を突込みながら、入口の戸より入來る。

ギイナ　お祖父さん、大變今日は晩く成りましたね。

エークダル　事務所が閉つてね。グローベルクの室に待つて居たのさ。それから又彼處を通らせられて——ふむ。

ギイナ　何か又寫し物が有りましたか。

エークダル　此包みに一杯さ。御覽よ。

ギイナ　そりや好う御座んしたね。

ヘードヰッヒ　未だ何か衣嚢に持つてらつしやるんぢやないの？

エークダル　えゝ？　あゝ、これは何でも無いんだよ。（洋杖を室の隅に置いて來て）ギイナや、又此仕事は長くかゝるわい。（後方の壁の滑り戸を一つ細目に開いて、）靜かに！（少時の間其室の中を覗いて居たが、又窃と戸を閉めて、）へゝ！　皆一團りに成つて好く寢て居るわい。彼奴は又自分で籠の中へ這入つたよ。

ヘゝ！

ヘードヰッヒ　籠の中ぢや寒かアないの、お祖父さま。

エークダル　いゝや些とも！　寒いッて？　あれだけ藁が有るぢやないか。（左側の奥の戸の方へ行く。）此處に燐寸が有つた筈だがね？

ギイナ　燐寸は抽斗の中に有りましたよ。（エークダル自分の室へ行く。）

ヘードヰッヒ　好いわねえ、お祖父さまあんなに寫し物が有つて。

ギイナ　本當に氣の毒な阿父さんさ。あれだけが彼の人のお小遣ひだからね。

ヘードヰッヒ　あれだけぢや、彼の可厭なエリクゼンの主婦さんの店で、午後中飲んでる譯にも行かんのだわね。

ギイナ　それよか長く居たいこともなからうさ。

短き沈默。

ヘードヰッヒ　未だ宴會は濟まんでせうか。

ギイナ　分らないね。未だだらうよ。

ヘードヰッヒ　まア阿父様は何んな美味しい物を喫つてらつしやるでせうね！　歸つてらつしやる時は、屹度御機嫌が好いことよ。阿母さんは左樣思はなくッて？

ギイナ　左樣だね。只、最う一つ留守の間に室の借手がついたらねえ——

ヘードキツヒ　だけど、そりや今夜でなくつても可いわ。

ギイナ　いゝえ、自宅ぢやあれを貸しても別に不都合はないんだよ。彼様して置いた所で些とも入用がないからね。

ヘードキツヒ　阿母さん、私左様云ふつもりで言つたのぢやないことよ。阿父様は何うせ御機嫌が好いから、今夜でなくとも可いと言つたのよ。室のことは此次迄藏つて置く方が可いわ。

ギイナ（凝乎と娘の顔を見遣りながら、）お前は何かい、阿父様が晩に他所からお歸りに成つた時、何か好い事を知らせて上げたいとは思はんのかい。

ヘードキツヒ　そりや左様思ふわ、左様すりや猶更嬉しいんだもの。

ギイナ（何やら一人で考へながら、）左様だ、これには何か有るね。

老エークダル二たび入來つて、一番前の戸から左手へ出て行かうとする。

ギイナ（椅子のまゝ半ば向直りながら、）お祖父さん、何か臺所から取つてらつしやるんですか。

エークダル　あゝ一寸ね。なに、來なくても可いよ。（出て行く。）

ギイナ　又火を弄つてるんぢやないか知ら？（少時待つて見て、）ヘードキツヒや、一寸行つて、お祖父さんが何爲てらつしやるか見てお出で。

エークダル湯氣の立つ湯の壺を持つて、二たび入來る。

ヘードキツヒ　お祖父さま、お湯を持つてらしたんですか。

エークダル　あゝ左様だよ。何を爲るのに欲しかつたからね——書物をするのに、インキがお粥の様にかたまつて仕舞つたからね——ふむ。

ギイナ　ですが、お祖父さん、先へ御飯を喫りませんか。彼處に出來てますよ。

エークダル　俺は夕飯なぞ喫べちや居られんのだよ、ギイナや。大變忙がしいんでね。誰も俺の室へ來るぢやアないよ、誰も——ふむ。

と、自分の室へ行く。ギイナとヘード井ツヒと互に顔を見合せる。

ギイナ　お祖父さんは何處でお金子を貰つて來たんだらうね。

ヘード井ツヒ　屹度グローベルクさんからでせう。

ギイナ　いゝえ、そんな筈はない。彼の人は毎でも私へ直接に金子を送つて呉れるんだからね。

ヘード井ツヒ　それぢや何處か信用で一瓶だけ借りて來たんぢや有りませんか。

ギイナ　誰がお祖父さんを信用するものかね。

ヤルマア　エークダル外套に鼠色の高帽を被つて右手より入來る。

ギイナ（縫物を打捨つて立上る。）まア、最うお歸りですか。

ヘード井ツヒ（同時に飛立つて迎へながら）阿父様、最う歸つてらしたの？

ヤルマア（帽子を取去つて）あゝ、他のお客さんも大抵歸つたよ。

ギイナ　そんなに早く？

ヤルマア　だつて、晝飯の御馳走だからね。（外套を脱がうとする。）

ギイナ　何う、私が取りませう。

ヘード井ツヒ　私も。

二人がかりで外套を脱がせる。ギイナがそれを後方の壁に掛ける。

ヘード井ツヒ　阿父様、お客さんは大勢でしたの？

ヤルマア　あゝ、そんなに大勢でもないよ。食卓へ着いたのは、それでも十二人か、十三人も有つたかな。

ギイナ　それで貴方は皆さんとお話を爲さいまして？

ヤルマア　あゝ少し許りね。だが、大抵はグレーゲルスと話をして居たよ。

ギイナ　彼の方は矢張前と同じ樣に醜ともないのですか。

ヤルマア　左樣さ、風采は餘り上らないね。時に阿父さんは歸つて見えた

かい。

ヘードヰッヒ　えゝ、お祖父さまはお室に見えてよ、何か書いて。

ヤルマア　何か仰有りはしなかつたかい。

ギイナ　いゝえ、何か仰有るやうな事が有るんですか。

ヤルマア　何も言はない――？　私はお祖父さんがグローベルクと一緒に被坐したと云ふことを聞いた樣に思ふがね。一寸行つて會つて來やう。

ギイナ　いえいゝえ、被行しやらない方が可いのよ。

ヤルマア　如何してだい！　私が這入つて來ちや不可ないとでも仰有つたのか。

ギイナ　お祖父さんは今夜誰にも會ひたくないんですつて――

ヤルマア　（目顏で知らせながら、）ふむ――ふむ。

ギイナ　（それとも氣附かず、）此處へ來てお湯を持つてらしたんですよ――

ヤルマア　あゝ、それぢや何だね、例の――？

ギイナ　私も左樣思ふんですよ。

ヤルマア　あゝ　あの白髮の阿父さんも氣の毒な人だな！――まア可い〳〵。一人でぽつ〳〵樂しませて置くが可い。

老エークダル平常着を着て、火の默いた煙管を啣へながら、自分の室より出來る。

エークダル　お歸りかい。何うも話聲がお前の樣に思つたて。

ヤルマア　えゝ、恰度今歸つて來ました。

エークダル　お前は俺を見なかつたのかい。

ヤルマア　いゝえ、ですが皆で貴方がお通りに成つたと言つてるのを聞きました――それだから私も貴方に隨いて來やうと思つたんで――

エークダル　ふむ、そりや親切に有難う。一體彼處に居たのは何んな連中だい。

ヤルマア　えゝ、いろんな人が居ましたよ。まづ侍從のフロールさん、侍從のバーレさん、侍從のカスペルゼンさん、それから侍從の誰某に誰某さん――私も一々は知りませんよ。

エークダル　（點頭きながら）如何だい、ギイナや。皆侍從ばかりで、侍從の外には誰も居なかつたとよ。

ギイナ　えゝ、彼の方々も、近頃はあの家で怖ろしく丁寧に成つたと云ふことですよ。

ヘード井ツヒ　阿父樣、其の侍從さん達は何か唱ひなすつたの？　何か吟誦でも爲すつたの？

ヤルマア　いや、只談話をして居たのさ。私に何か吟じて呉れと言つたんだが、私もまさか其んな事は爲なかつたさ。

エークダル　お前が遣らなかつた？

ギイナ　貴方遣つてお上げなされば可いのにねえ。

ヤルマア　いや、人間は左樣誰の言ふことでも諾くもんぢやアないよ。

（室の中を歩き廻る。）兎に角、私は諾かないよ。

エークダル　成程、ヤルマアは左樣安ッぽい人間ぢやないて。

ヤルマア　なにも稀に交際社會へ出たものが、他人の興を添える爲に左樣骨を折る理窟はないからね。自分達で何でも遣るが可いのよ。彼の連中は次から次と宴會を渡つて歩いて、來る日も〳〵飲んだり喰つたりしてるんだからね。自分達こそ氣を利かして、御馳走に成つたお禮に何か遣つたら可いんだ。

ギイナ　ですが、貴方そんな事仰有りやしなかつたでせうね？

ヤルマア　（滿足げに口の中で言ふ。）ほッほッほ――眞個よ、私も些とばかり當附けて遣つたのさ。

エークダル　侍從達に對してぢやなからう。

ヤルマア　如何して無いのです。（輕く）それから後で一寸トーケエ酒の議論が出ましたよ。

エークダル　トーケエ酒！　そりやア立派な酒が出たね。お前は知つてるかい。

ヤルマア　（靜乎と立停つて）そりや立派な酒でせうよ。ですが、あれも收穫の時季に依つて違ふなア御存じでせう。日光を餘計吸收しないのは駄目ですからね。

ギイナ　まア貴方好く知つてらつしやるわね。

エークダル　で、彼の連中はそんな話でも爲たのかい。

ヤルマア　爲やうと思つたんですよ。併し侍從が恰度それと同じだと言つて遣つたら可厭な顏をしてましたせ——彼の連中だつて矢張時候の違ふの

は風味も違ふんですからね。

ギイナ　貴方まア何を言つてらしたの？

エークダル　へゝえ　ぢや、彼奴等それも聞かされたんだね？

ヤルマア　えゝ、向附けにでさ。

エークダル　如何だい、ギイナ。俺の許のヤルマアは、侍從に向附けて言つて遣つたんだとさ。

ギイナ　まア憫れた——！　向附けにですつて

ヤルマア　左樣さ。だが、これは餘り他人に話さん樣にしてお呉れよ。そんな事はまア本來なら言ふ所ぢやないからね。勿論そりや和氣靄々の中に濟んで仕舞つたのさ。彼の連中も愉快な好い人達だからね。私も別に彼の人達を憤らせる氣ぢやなかつたのさ——私はね。

エークダル　だが、面と向つて

ヘルド井ツヒ（甘えて媚びる樣に、）本當に禮服を着てらつしやると立派だわね。阿父樣、好く似合つてよ。

ヤルマア　うむ、似合ふだらう。實際此服は好く俺に添るよ。宛然自分が注文して拵へさせたやうだね――脇の下が少し詰む樣には思ふが。ヘードキツヒや、手傳つて脫がせて呉れ。（上衣を脫去る）あゝ、短衣を着よう。ギイナや、短衣は何處に有るかい。

ギイナ　此處に有りますよ。（短衣を持つて來て着せる。）

ヤルマア　あゝ左樣だ！　明日の朝は忘れぬ樣に一番先にモルキツクの許へ此上衣を返して來てお呉れよ。

ギイナ（それを彼方へ置いて來て、）大丈夫ですよ、私が氣を附けますから。

ヤルマア（眷伸をしながら、）だが、要するに此方が好い心持だね。氣樂で自由な平常着の方が一層私の全人格に適當して居るやうだよ。ヘードキツヒ

や、左樣は思はんかい。

ヘードキツヒ　左樣ね、阿父樣。

ヤルマア　かうして――頸襟を兩方へ垂らして弛く結び直すとだよ――えゝ？

ヘード井ツヒ　左樣、左樣すると阿父樣のお髭と房々した攀毛とに好く似合つてよ。

ヤルマア　こりや本來攀毛ぢやアないよ。捲髮と言つて貰ひたいね。

ヘードキツヒ　えゝ、ですけれども矢張大きな攀毛だわ。

ヤルマア　いや、捲髮だよ。

ヘードキツヒ（暫く默つて居た後、親父の短衣を引張りながら、）阿父樣！

ヤルマア　えゝ、何だい？

ヘード井ツヒ　あら可厭だ、好く知つてらしやる癖に。

ヤルマア　いや、眞個知らないよ――

ヘードヰツヒ（半ば笑ひ、半ば鼻聲を出しながら、）え、左様よ、さア最う私を焦らしツこなしにして頂戴よ。

ヤルマア　如何して、何を言つてるんだな。

ヘードヰツク　おゝ可厭――だ。さア、何處に有るんですよ、阿父樣。好い物貰つて來て遣るつて、お約束なすつたぢや有りませんか、そら？

ヤルマア　あゝ――其事ならすつかり忘れて仕舞つた！

ヘードヰツヒ　可厭ですよ、阿父樣、私を調戯つてらつしやるんでせう。そんな事しちやア惡いわ。何處に隱してらつしやるんですよ。

ヤルマア　いや、眞個貰つて來ることを忘れたんだよ。だが一寸待て！

ヘードキツヒや、其外に何かお前に持つて來た筈だから――（側へ行つて、上衣の衣囊を探る。）

ヘードヰツヒ（跳れ廻つて、手を叩きながら、）阿母さん、阿母さん！

ギイナ　だから、少しの間待つてらつしやいと言ふのに――

ヤルマア（一枚の紙を持つて、）さアこれだ、これを御覽よ。

ヘードヰツヒ　これ？　只紙の片ッ端ぢや有りませんか。

ヤルマア　これがお料理の次第書だよ、皆お料理の名が書いて有るんだよ。此處を御覽、『献立』と云つて、お料理の次第書のことだよ。

ヘードキツヒ　此外に何も持つていらしやらなかつたの？

ヤルマア　いや、つい外の物は忘れて仕舞つてね。併し實際の話だが、かう云ふ御馳走はそれ程喫べて美味しいものぢやないよ。まア其机に坐つて、お料理の献立を讀んで見ろや、何んな味のするものだか、阿父さんが話して聞かせるからね。ヘードキツヒや、此處を一つ御覽！

ヘードキツヒ（涙を呑込みながら、）有難う。

下に坐りはしたものゝ、讀まうとはしない。ギイナ目使ひで娘を叱る。ヤルマアそれに心附く。

ヤルマア　（室の中を彼方此方歩きながら、）や、一家の主人が何れだけ苦勞してるかと云ふことは誰も知りやアしない。で、何か詰らん物でも忘れやうものなら、直に泣顔をして見せるのだ。まア可い、可い、だん〳〵それにも慣れるだらう。（暖爐の傍で、老人の腰掛けてる椅子の側に停まる。）阿父さん、今夜彼處を覗いて見ましたか。

エークダル　あゝ、覗いて見たが、彼奴ア籠の中へ這入つてるよ。

ヤルマア　本當ですか。ぢや、だん〳〵慣れて來たんですね。

エークダル　如何だ、俺が言つた通りだらう。だがの、未だ二三爲て遣ることが有るよ、些細な事で——

ヤルマア　二三改良する點ですね。

エークダル　併しそれが極めて大切なんだよ。

ヤルマア　左樣です。阿父さん、其改良の事について相談しやうぢや有りませんか。此處へ被入しやい、長椅子に腰掛けて話しませう。

エークダル　可からう。ふむ——だが先づ煙草を詰めてからにしやう。一つ煙管の掃除をして來るからね。ふむ——（と、自分の室へ行く。）

ギイナ　（ヤルマアに笑ひ掛けながら、）阿父さんの煙管掃除ですか、

ヤルマア　あゝ左樣か〳〵、だが、まア打捨つて置けよ——他に仕樣のない、氣の毒な人だからね。——そこで改良の話だが——いつそ一思ひに明日遣つて仕舞ふかな。

ギイナ　明日は貴方、そんな暇は有りませんよ。

ヘード井ツヒ　（口を挿む。）あゝ左樣でしたわね。

ギイナ　あれが有るぢや有りませんか、あの種板を修整しなきや不可ない

でせう。最う何遍も使が來ましたよ。

ヤルマア　あゝ又種板か。そんな物は直に遣つちまはアね。其外に新しい注文は來なかつたかい。

ギイナ　えゝ、來ませんでした。明日は最うあの二枚しか有りませんよ——知つてらつしやるでせうね。

ヤルマア　それッ限りかい？　眞個お前が自分で骨折らなきや——

ギイナ　ですが、此上如何するんですか。私や出來るだけ新聞に廣告もしてるんですよ。

ヤルマア　左樣さ、新聞々々と云ふが、新聞が何れだけ役に立つか解つたらう。で、何だらうね、室は誰も見に來なかつたらうね。

ギイナ　えゝ、未だですよ。

ヤルマア　此方で氣を附けてなきや、只待つてるばかりだね——これこそ

本當に骨を折つて見なきや駄目だよ。

ヘード井ッヒ　（側へ行つて、）阿父樣、笛を取つて來て上げませうか。

ヤルマア　いや、笛なぞ要らないよ。俺は此世で樂しみを爲やうとは思はんからね。（歩き廻りながら、）左樣だ、明日は働かう。働かなかつたら見て呉れえ。まア安心してろよ、私も此力のつゞく限りは、何時迄も働いて上げるからね。

ギイナ　ですが貴方、私や何も左樣云ふつもりで言つた譯ぢやないんですよ。

ヘード井ッヒ　阿父さん、私麥酒を持つて來て上げませうか。

ヤルマア　いや、眞個要らないよ。俺は何も欲しくない、何も——（不圖立停つて、）麥酒？　お前麥酒と言つたのかい。

ヘード井ッヒ　（浮立つて、）えゝ、阿父さん。本當に好い新しい麥酒よ。

ヤルマア　左様か――左様お前が言ふなら、一本だけ持つて來て呉れ。

ギイナ　えゝ、左様なさいな。さうして、皆面白く遣らうぢや有りませんか。（ヘード井ツヒ臺所の戸の方へ走り行く。）

ヤルマア　（暖爐の傍でヘード井ツヒを留める。凝乎と顔を見詰めながら、頭の周りに腕を捲いて抱き緊める。）ヘードキツヒや、ヘードキツヒや！

ヘード井ツヒ　（嬉し相に涙含んで、）阿父さん！　嬉しいわねえ。

ヤルマア　まア左様言つて呉れるな。俺は一人金持の宴會へ招ばれて行つて――自分一人で山海の珍味に有附きながら――！それでお前には――！

ギイナ　（机に坐つたまゝ、）何ですか、そんな事――最う可いんですよ。

ヤルマア　だがね、餘り俺のことを悪く思つて呉れるなよ。お前は知つて居るだらう、そんな事をしても、俺がお前を一生懸命愛してることは、ね。

ヘードキツヒ　（父の周りに兩腕を投げながら、）だから私達も阿父様を愛してる

わ。本當に〳〵。

ヤルマア　でね、偶に俺の悪い事が有つても――左様云ふ時にはね――阿父さんは苦勞が山の様に有るんだと云ふことを考へて呉れないぢや不可んよ、可いかい。あゝ〳〵！（眼を拭つて、）こんな時に麥酒なんか欲しくないよ。さ、笛を持つて來て呉れ。（ヘード井ツヒ本箱の傍へ走つて行つて、それを持來る。）有難う！　それで可い。かうして手に笛を持つて、お前達二人を傍に置いて――あゝ――！

ヘード井ツヒ机に近づいて、ギイナと並んで坐る。ヤルマア彼方此方彷つて居たが、やがて確かと身構へをして、ゆつくりした悲しざうな調子で、感情的な表情をしながら、ボヘミヤの盆踊の歌を吹く。

ヤルマア　（急に笛の音を止めて、ギイナに左の手を伸べながら、感情を籠めて言ふ。）ギイナや、此家は憐れな貧しい家だ。けれども、これが私達の家だよ。私は

心から言ふがね、私の幸福は此中に有るんだよ。（二たび笛を取上げて吹きにかかつたが、其瞬間入口の戸を叩く音がする。）

ギイナ　（立上つて、）一寸貴方――何誰か見えたやうですよ。

ヤルマア　（笛を本箱の中に置いて、）又かい！（ギイナ出て戸を開く。）

グレーゲルス　ヱルレエ　（廊下で、）御免なさい――

ギイナ　（やゝ脊後へ下つて、）まア！

グレーゲルス　――寫眞師のエークダル君のお宅は此處ぢや有りませんか。

ギイナ　はい、宅で御座います。

ヤルマア　（戸口迄行つて、）グレーゲルス君、到頭遣つて來たね。さ、這入つて呉れ玉へ。

グレーゲルス　（這入りながら、）いづれ會ひに來ると言つて置いたらう。

ヤルマア　だが今夜――？　君は會を捨てゝ來たのかい。

グレーゲルス　會も親父の家も二つとも捨てゝ來たよ――　や、エークダルの奥さん、今晩は。貴方は私をお分りに成りますか。

ギイナ　分りますとも。ヱルレエの若旦那が分らないで如何しませう。

グレーゲルス　いや、私や母の方に似て居るんですよ。勿論、母は好くおぼえてお坐でせうが。

ヤルマア　君は家を出たと言つたね？

グレーゲルス　あゝ。旅館へ行つて泊つたよ。

ヤルマア　左樣か。兎に角來た以上は、外套を脱つて坐つて呉れ玉へ。

グレーゲルス　有難う。（と、外套を脱ぐ。此時は最う田舍染みた單純な仕立の鼠色の服を着て居る。）

ヤルマア　此處へ來たまへ、長椅子の上へ。何卒くつろいで呉れ玉へ。

（グレーゲルス長椅子の上に坐る。ヤルマア机の傍の椅子に掛ける。）

グレーゲルス　（四邊を見廻しながら、）ぢや、君は此處に住んでるんだね、ヤルマア君――これが君の住宅だね。

ヤルマア　こりや僕の技術室だよ――見らるゝ通りね。

ギイナ　ですが、私どもの宅ぢやこれが一番大きな室ですから、大概此處に往つてるんで御座いますよ。

ヤルマア　いや、以前は最つと好い處にも住んで居たがね。併し此家で好いのは周りに幾つもこんな外室が在つてね、それが大變便利なんだよ。

ギイナ　未だ廊下の向側に、他人さんにお貸し申しても可いやうな室が有るんで御座いますよ。

グレーゲルス　（ヤルマアに向つて、）あゝ、それぢや下宿人が有るんだね。

ヤルマア　いや、未だそれが無いんだよ。何うも却々見附からんもので

ね。始終氣を附けてなくちや成らんのさ。（ヘード井ツヒに向つて、）あの麥酒は如何したい。

ヘード井ツヒ點頭いて臺所へ出て行く。

グレーゲルス　君の娘かい。

ヤルマア　左樣だ、あれがヘードキツヒだよ。

グレーゲルス　一人限りか。

ヤルマア　あゝ、只一人さ。あの兒が僕等の生活の喜びでも有れば――

（聲を潜めて）――同時に又深ア い悲しみでも有るんだよ。

グレーゲルス　如何したと云ふんだな。

ヤルマア　何うも眼が瞑れるらしいんだよ。

グレーゲルス　盲目に成る？

ヤルマア　あゝ。未だほんの左樣云ふ徵候が見えたと云ふだけで、當人も

暫らくの間はそれを感じなからうと云ふんだがね。併し醫者は僕等に警戒したよ。何うも早晩左様成ることは免れないんだね。

グレーゲルス　ま、何と云ふ不幸だね。又如何してそんな事に成つたんだい？

ヤルマア　（嘆息して、）矢張遺傳だね。

グレーゲルス　（飛立つ。）遺傳？

ギイナ　良人の阿母様がお眼が悪かつたと云ふことで御座いましてね。

ヤルマア　左様、親父が左様言ふんだ。僕はおぼえて居ないがね。

グレーゲルス　可憫相な子だな。で、自分ぢや如何思つてるんだい？

ヤルマア　まア君考へて見て呉れたまへ、そんな事が親として彼の兒に言はれるもんぢやないよ。何も知らずに居るのさ。毎日嬉し相にして、何の心配もなく、小鳥の様に囀りながら、生涯の闇の中へ飛んで行き居るんだ

よ。（涙聲に成つて、）あゝ、僕には迚も堪へられんよ。グレーゲルス君。

ヘードヰツヒ麥酒と洋盃とを載せた盆を持つて來て、それを机の上に置く。

ヤルマア　（娘の髪を撫でながら、）有難う、〳〵、ヘードヰツヒや。

ヘードヰツヒ父の頸へ腕を廻して、其耳に囁く。

ヤルマア　うゝむ、未だ麪包や牛酪は可いよ。（顔を上げて、）だが、グレーグルス君、君は欲しくないか。

グレーゲルス　（手を振つて留めながら、）いや〳〵、欲しくはないよ。

ヤルマア　（なほ憂鬱に沈んだ聲で、）左様か、だが矢張少しは持つてお出でよ。皮の所が有つたら、そりや俺が喫べるからね。牛酪をどつさり附けてお出しよ、可いかい。

ヘードヰツヒ快活に點頭いて、二たび臺所へ這入つて行く。

グレーゲルス　（眼もてヘードヰツヒの後を見送つて居たが、）其外は、隨分健康で強

さうだね。

ギイナ　えゝ、お蔭様で、外は別に惡い所もない樣で御座いますよ。

グレーゲルス　大きく成つたら阿母さんの通りに成りますね、奥さん。お幾つですか。

ギイナ　明後日が恰度あれの誕生日ですから、間もなく十四に成るんで御座いますよ。

グレーゲルス　歳の割には身體が高いんですね。

ギイナ　えゝ、昨年の間にめき〳〵大きく成りましてね。

グレーゲルス　いや、子供が大きく成るのを見ると、誰しも自分達の歳が思はれますね。——貴方がたは夫婦に成られてから、何年に成りますかい。

ギイナ　私達が一緒に成りましてから——かうと——彼是十五年にも成りますかね。

グレーゲルス　實際それだけですか。

ギイナ　（急に注意深く成つて、相手の顔を眺める。）えゝ、左樣で御座いますよ。

ヤルマア　眞個其通りだ。十五年に二三箇月足らんばかりだよ。（調子を變へながら、）グレーゲルス君、君は其間山の仕事場に居たんだが、隨分長かつたらうね。

グレーゲルス　暮す間は長いやうなものゝ、經つて見ると、何時の間に經つたか自分でも分らない位だよ。

老エークダル煙管を持たずして、頭に古い型の制帽を被りながら、自分の室より出で來る。歩容やゝ不確である。

エークダル　ヤルマアや、さあ一つ彼の相談を爲やうじやないか——ふむ——あれは如何やらだつたね。

ヤルマア　（傍へ行きながら、）阿父さん、お客樣が有るんですよ——グレーゲ

ルス　ゼルレエ君――如何です、貴方はおぼえて被坐しやいますか。

エークダル　（其時立上つたグレーゲルスを凝乎と見詰めながら、）ゼルレエさん？

そりや息子の方かい。して、俺に何の用が有るのかな。

ヤルマア　何も有りやしません、會ひに來たのは私ですよ。

エークダル　左樣か、それぢや何も不思議な事はない。

ヤルマア　有りませんとも。

エークダル　（兩腕を振りながら、）いや、俺は恐れて居るのぢやない、可いかい、恐れて居るのぢやないが――

グレーゲルス　（老人の傍へ行つて、）エークダル中尉、貴方の元の獵場から御機嫌を伺ひに參つたんですよ。

エークダル　獵場？

グレーゲルス　それ、ヘエダルの奧の仕事場ですよ、御存じでせう。

エークダル　あゝ彼處の――左樣だ、彼の邊のことなら、昔は好く知つて居たわい。

グレーゲルス　其頃貴方は非常な獵好きでしたつてね。

エークダル　左樣よ、そりや左樣でないとは言はんさ。――君は俺の制帽に眼を着けてるね。家の中で被るのに何も許可を受ける必要はなからう。これを被つて町中へ出さへしなきや――

ヘード井ツヒ麪包と牛酪の皿を持つて來て、それを卓の上に置く。

ヤルマア　阿父さん、ま、坐つて一杯お上り成さい。グレーゲルス君、君も何卒。

エークダル呟きながら長椅子の所まで蹣跚き行く。グレーゲルス一番老人に近い椅子に坐る、ヤルマアはグレーゲルスの他の側に。ギイナ卓から少し離れて縫物をしながら坐つて居る。ヘード井ツヒ父の傍に立つ。

ゲレーゲルス　エークダル中尉、貴方はおぼえて被坐しやいませんか、ヤルマア君や私は夏の休暇とか、基督降誕祭とかに好く山へお邪魔に上つたものですが。

エークダル　君が來た？　いや〳〵〳〵、そりや俺は知らないよ。だが、俺の獵好きで有つたのは、實際の話ぢや。俺は又熊も射つたよ。熊を九疋迄打つたことが有る。

ゲレーゲルス（氣の毒相に老人を見遣りながら、）で、今ぢや全く獵にはお出掛けに成らんのですか。

エークダル　左樣は行かないよ、君。時遇打つても見るがね。勿論其の、昔の樣ぢやないのさ。何故と云ふに、君――山林が、山林が――！（一口飲む。）彼處ぢや、山林は今でも立派に立つて居るかい。

クレーゲルス　貴方がお坐に成つた頃の樣ぢや有りませんよ。隨分濫伐しましたからね。

エークダル　濫伐？（聲を潛めて、恰も怖ろゝかの如く、）そりや危險だね。結果は好くないよ。山林と云ふものは復讐するからね。

ヤルマア（洋盃を充たしながら、）さ、最少しお上んなさい。

ゲレーゲルス　貴方の樣なあんなに――外野の好きな方が、如何してこんな風通しの惡い町の中に、四方壁で閉されて住んで居られるでせうね。

エークダル（靜に笑ひながら流眄にヤルマアを見る。）いや、此處はそんなに惡かアない。如何してそんなに惡い所ぢやないよ。

ゲレーゲルス　併し貴方があんなに好いて被坐したものが皆無いぢやありませんか――山から山を渡る冷たい微風とか、森の中の鳥や獸を友とした自由な生活とか――？

エークダル（微笑しながら、）ヤルマアや、あれを一つお目に掛けやうぢやな

いか。

ヤルマア（遽てゝ、少々當惑しながら。）あゝ、あれは不可ませんよ。阿父さん。今晩は不可ませんよ。

グレーゲルス　何を見せやうと仰有るんだい。

ヤルマア　いや、何でも無いんだよ――君には此次に見せるからね。

グレーゲルス（老人に向つてつゞける。）エークダル中尉、實は私やこんな事を考へたから、今の様なことを伺つたんですよ――貴方を私と一緒に山へお連れ申さうと思つてね。私も直き歸ることに成るでせうから。なに、寫し物だつて大抵彼處に有りますよ。此處ぢや貴方の興味を繋ぐやうなものは何一つ無いでせう――貴方を喜ばせ　貴方の心を娯しませるやうなものは、何一つ――

エークダル（驚いたやうな顔をして、凝乎と相手を見詰る。）俺が何一つ持たな

い――！

グレーゲルス　勿論貴方にはヤルマア君が有る、有るには有るが、彼の君には又彼の君の家族が有りますからね。それに貴方のやうな自由で野生的な生活に向つて、始終熱愛を持つて被坐した方は――

エークダル（卓を一つどやして。）ヤルマア、如何してもあれを見せやう。

ヤルマア　ですが、阿父さん、そんな事を爲たつて詰らんぢや有りませんか。それに最う眞暗なんですよ。

エークダル　馬鹿を言へ、戸外は月夜だよ。（立上つて。）如何しても俺は見せるよ。其處を通して下さい。ヤルマアや、來て手傳つて呉れよ。

ヘード井ツヒ　阿父様、爲てお上げなさいよ。

ヤルマア（身を起して。）それぢや、まア可からう。

グレーゲルス（ギイナに向つて。）何ですか。

ギイナ　いえ、最うそんな大した物だと思つて下すつちや不可ませんよ。

エークダル、ヤルマアの兩人後方の壁へ近づいて、各々滑り戸の一枚に手を掛けて引開けやうとする。ヘードヰツヒ老人を手傳ふ。グレーゲルス長椅子の傍に立ちながら見て居る。ギイナ坐つたまゝ縫物をつゞける。戸を開けた中より、一つの大きな廣い不規則な屋根裏の室あらはる。いろ〳〵な角や隅のある中に、下の室から二本の暖爐の煙筒が、それを貫きて走るが見ゆ。幾つかの天窓ありて、月の光が大きな室のところ〴〵を照して居る。他の部分は濃い蔭の中に横はる。

エークダル　（グレーゲルスに向つて、）何卒此處へ來て下さい。

グレーゲルス　（皆の側へ近づいて、）ですが、これは何ですか。

エークダル　ま、來て見て下さい。

ヤルマア　（やゝ當惑しながら、）これが親父の物なんだよ。解つたらう。

グレーゲルス　（戸口に立つて、室の中を覗き込みながら、）や、家禽を飼つてお坐ですね。

エークダル　確に家禽を飼つて居ますよ。今は塒へ這入つてますがね。だが、最一度晝間見て遣つて下さい！

ヘードヰツヒ　未だ彼處に何か——

エークダル　しッ——しッ、未だそれを言つちや不可んよ。

グレーゲルス　それに鳩も居ますね。

エークダル　えゝ、鳩も居りますよ。彼奴等は屋根裏に巣を喰つて居ますぢやて。鳩は御承知の通り高い所に棲るのが好きぢやからね。

ヤルマア　あれでも普通の鳩ぢやないんだよ。

エークダル　普通の鳩？　うむにや、確にそんな物ぢやない。ラムブラアも居れば、プウタアも一番居る。だが此處へお出なさい。彼處の壁の傍に箱が有るが、見えるかな。

グレーゲルス　あゝ有ります、あれは何にお使ひに成るんですか。

エークダル　あの中には兎が寢て居りますぢやて、えゝ君。

グレーゲルス　なに、兎迄飼つて被坐しやる？

エークダル　如何にも、兎を飼つて居りますぢや。ヤルマアや、お客樣は兎を飼つてるかと訊かれるわい。ふむ。で、今度はあれぢや、あれを一つ見て下さい。此處に在る、〳〵。ヘードヰツヒや、そこ退いて居れ！　此處に立つて居て下さい、え、宜しい——そこで一つ下を見て下さい。藁の入つた籃が見えませうがな。

グレーゲルス　えゝ見えます——籃の中に庭鳥が居るやうですね。

エークダル　ふむ——『庭鳥』か。

グレーゲルス　こりや家鴨ぢや有りませんか。

エークダル（傷けられて、）勿論家鴨ですよ。

ヤルマア　だが、家鴨の何んな種類だと思ふかね。

ヘードヰツヒ　普通の家鴨ぢやないことよ。

エークダル　しッ！

グレーゲルス　と言つて、土耳其種でもないでせうね。

エークダル　いや、ヱルレエ——君、そりや土耳其種ぢやない、鴨ですよ。

グレーゲルス　いや、左樣ですか。鴨？

エークダル　えゝ左樣ですとも。君が『庭鳥』ぢやと云はれたのは——鴨ですよ、われ〳〵の鴨ですよ、ねえ君。

ヘードヰツヒ　私の鴨ですよ。鴨は私のですよ。

グレーゲルス　で、何ですかい。此屋根裏で育ちますか。

エークダル　勿論そりや水を浴びるだけの槽は具へて置くのさ。そりやア左樣だよ。

ヤルマア　一日置きに水を取代へて遣るんだからね。

ギイナ　（ヤルマアの方へ向きながら、）貴方、此處は氷でも張る樣に寒く成りましたよ。

エークダル　ふむ、それぢや最う閉めやう。又、彼奴等が休息の邪魔をしても不可んからね。さ、閉めてお呉れ、ヘードヰッヒや。

ヤルマアとヘード井ッヒとして屋根裏の室の戸を一緒に閉める。

エークダル　此次に好くあれをお目に懸けませう。（暖爐の傍の安樂椅子の上に坐る。）いや、あれは奇態な鳥だよ、あの鴨と云ふ奴はね。眞個だよ。

グレーゲルス　貴方は又如何してあれを捕まへたんですか、エークダル中尉。

エークダル　俺が捕まへたんぢやない。あの鳥についてはお禮を言はなくちや成らん人が、此町に一人有るんだよ。

グレーゲルス（少し飛立つ。）そりや私の親父ぢや有りませんか。

エークダル　いや、旨く中つた。君の阿父さんに違ひないよ、ふむ。

ヤルマア　併し君が中てたのは不思議だね。え、グレーゲルス君。

グレーゲルス　君は先刻僕の親父からいろんな物を貰つたと言つてたぢやないか。それだから大抵左樣だらうと——

ギイナ　ですが、此鴨はゼルレエさんの手から頂いた譯ぢやないんですよ——

エークダル　なに、此鴨についてお禮を言はなくちや成らんのは、矢張ホーコン　ゼルレエ君だよ、ギイナや。（グレーゲルスに向つて、）君の阿父さんが短艇で乘出して、此鴨を打つたんだよ。だが、阿父さんは近頃大分眼が惡いだらう。ふむ。で、只傷を附けたに止まつたのさ。

グレーゲルス　あゝ！　ぢや、此鴨の身體には二つ彈丸を受けて居たんでせう。

ヤルマア　左様、二つか三つだつたね。

ヘード井ツヒ　羽翼の下を打たれたもんだから、それで飛べなかつたんですよ。

グレーゲルス　そして、海の底へ沈んだんでせう。えゝ？

エークダル（睡たさうな、濁つた聲で、）勿論、鴨は毎でも左様するさ。出來るだけ深く底へ潜り込んで、海の藻や昆布や、其外何でも其處に生えて居る、ごた〳〵した物の中へ碇り咬ひ込むのよ。そして、二度と二たび浮いては來ないのさ。

グレーゲルス　併し貴方の鴨は浮いて來たんぢや有りませんか、エークダル中尉。

エークダル　そりや君の阿父さんが素晴しく怜悧な犬を持つて居たからよ。其犬が鴨の後から潜つて、それを啣えて來たのさ。

グレーゲルス（ヤルマアに向つて、）で、それから君が此處へ連れて來たのかい。

ヤルマア　いや、直にと云ふ譯ぢやない。最初は君の阿父さんの宅へ連れて行かれたが、何うも其處ぢや旨く育たんのだね。で、ペッテルゼンに吩咐けて殺させやうとしたのよ。

エークダル（半ば眠りながら、）ふむ——左様だ——ペッテルゼン——あの馬鹿が——

ヤルマア（一層低聲に成つて、）僕等の手に入つたのは斯う云ふ譯なんだよ、えゝ。僕の親父は一寸ペッテルゼンを知つて居るので、鴨の話を聞いた時に、何とか話をつけて、それを此方へ渡す様に爲たんだよ。

グレーゲルス　で、此屋根裏ぢや好く育つんだね。

ヤルマア　あゝ、不思議に好くね。大分肥えて來たよ。畢竟あれも隨分長

く此處に居るので、今と成つちや鴨の本性たる郊野の生活を忘れたんだね。それだから斯んな所でも育つと云つたやうなものよ。

グレーゲルス　成程、そりや君の言ふ通りだ、ヤルマア君。これからも、決して一目でも空や海を見せない樣にしたまへ――いや、僕も斯うしちや居られんのだ。阿父さんはお臥(やす)みに成つた樣だね。

ヤルマア　いや、其事なら――

グレーゲルス　で、何かい――君は貸しても可い室が有ると言つたね――餘分の室が？

ヤルマア　あゝ、それが如何したのかい。君は誰か心當りが――

グレーゲルス　僕が其室を借りられんかね。

レルマア　君が？

ギイナ　いえ、ゼルレエさん、貴方は――

グレーゲルス　僕ぢや不可んのかね。僕で可いやうなら、明日の朝眞先(まつさき)に荷物を運んで來やうと思ふがね。

ヤルマア　左樣か、そりや最う大いに喜んで――

ギイナ　ですが、ゼルレエさん、彼の室は貴方がたが被坐しやるやうな――

ヤルマア　ギイナ！　お前は如何してそんな事を言ふんだい？

ギイナ　えゝ、彼の室は廣くもなし、明りの工合も好くないので、それに――

グレーゲルス　奥さん、そんな事は一向構ひませんよ。

ヤルマア　僕に言はせりや、隨分好い室だ。それに室の道具だつて惡くはない。

ギイナ　ですが、階下(した)に住んでる二人(ふたり)のことを考へて御覽なさい。

グレーゲルス　二人ッて、何です？

ギイナ　えゝ、一人は家庭教師でしたが――

ヤルマア　そりやモルキック君と云ふんだよ。

ギイナ　それに最一人レリングと云ふ醫者が居るんですよ。

グレーゲルス　レリング？　彼の男なら一寸知つてますよ、山で些との間働いて居たことが有りますからね。

ギイナ　彼の二人と來たらそりやア手に負へない人達ですよ。夜は勝手放題に時々出掛けて、晩く成つてから歸つて來ますし、それに毎も――

グレーゲルス　そんな事は直に慣れッこに成りますよ。私や此鴨の樣な工合に成るだらうと思ひますね。

ギイナ　えゝ、それにしても、先づお見合せに成つた方が可からうと思ひますわ。

グレーゲルス　奥さん、貴方は何うやら私が此家へ來るのがお可厭な樣に見えますね。

ギイナ　いえ、如何してそんな事を仰有るんです。

ヤルマア　うむ、ギイナや、お前は何うも變だよ。（グレーゲルスに向つて、）で、君は當分此町に居るつもりなのかい。

グレーゲルス（外套を着ながら、）あゝ、今ぢや居る氣に成つたよ。

ヤルマア　それで阿父さんの宅には居ないと云ふんだね。全體何をして遣つて行く心算なんだい？

グレーゲルス　あゝ、それを知つて居たら、僕もこんなにまづくは遣つて居なかつたんだらうよ。だが、不幸にしてグレーゲルス――『グレーゲルス』と來て、其後に『ゼルレェ』と續くんだよ。こんな名で他人から呼ばれる身に成つて見るとだね！　君はこんな可厭な名を聞いたことが有るか

い。

ヤルマア　僕はそんなにも思はんがね。

グレーゲルス　うふ！　何だ！　僕はこんな名で返辭をするやうな奴には唾を吐き掛けて遣りたい位に思ふがね。此世で僕の樣にグレーゲルス――ゼルレエと呼ばれる不幸を荷ふ身に成つては――

ヤルマア　はゝ！　グレーゲルス　ゼルレエが嫌ひなら、何に成らうと云ふんだね。

グレーゲルス　左樣さ、僕に選擇の自由が有るなら、いつそ怜悧な犬にでも成るね。

ヘード井ッヒ（思はず知らず、）おゝ可厭だ！

グレーゲルス　左樣だ、素晴しく怜悧な犬に成りたいね。あの鴨が水を潜つて、海の藻や昆布や、底の泥の中に碇かり咬ひ込んで居ると、後から海

の底迄追掛けて行くやうな、彼れだね。

ヤルマア　一寸待つて呉れ玉へ、グレーゲルス君――君の言ふことは一言も解らないよ。

グレーゲルス　あゝ、こんな事は解らなくつても可いんだよ。では、明日の朝早く引越して來るからね。（ギィナに向つて、）私や何でも自分に爲ますから、貴方に御迷惑は掛けないつもりですよ。（ヤルマアに向つて、）他の談は明日にして置かうね。奥さん、左樣なら。（ヘード井ッヒに向つて點頭く。）左樣なら。

ギィナ　左樣なら、ゼルレエさん。

ヘードキッヒ　左樣なら。

ヤルマア（蠟燭を點火して居たが、）一寸待ちたまへ、燈火を見せるから、梯子段のところが暗いからねえ。

グレーゲルス、ヤルマアの兩人入口の戸を出て行く。

ギイナ　（縫物を膝の上に置いて、眞直に自分の前を見詰めながら、）犬に成りたいだなんて、變な事を仰有るわねえ。

ヘード井ツヒ　阿母様は如何思つて――私、何だかあんな事を仰有つてたけれど、全く別な事を言つてらしたんぢやないかと思つてよ。

ギイナ　ぢや、何を言つてらしたんだい？

ヘード井ツヒ　こりやア知らないわ。だけど、始終何だか彼の方の言つてらしたことは、お腹の中で思つてらつしやること、違つてたやうな氣がしたわ。

ギイナ　お前も左樣お思ひかい、眞個、變だわねえ。

ヤルマア　（歸り來る。）洋燈が未だ點いて居たよ。（蠟燭を消して下に置く。）さア、やつと一口御飯が喫べられる樣に成つたぞ。（麪包と牛酪をとつて喰ひ始める。）如何だい、ギイナ、御覽よ――えゝ？　お前が眼を開いて見てさへすりや――

ギイナ　何です、眼を開いて見てるんですつて？

ヤルマア　左樣ぢやないか、お前はかうして到頭室が貸せられたのを嬉しいと思はんのかい。それに、まア考へて御覽よ――グレーゲルスの樣な彼んな好い人にだせ――古い友達のよ。

ギイナ　私は如何言つて可いか分りませんね、それに就いちや。

ヘード井ツヒ　阿母さま、阿母さまツてば――悉皆戯談ですよ。

ヤルマア　お前は何うも變だねえ。先にやあんなに室を貸したがつて居なから、今と成つて可厭だと言ふ――

ギイナ　えゝ、只ねえ、それが他の人だつたらと思ふんですよ――貴方、ゼルレエさんが聞いたら何と仰有るだらうと思つてらして？

ヤルマア　ゼルレエの親父さんがか。何も彼の人の知つたことぢやないさ。

ギイナ　ですが、彼様してあの方が家出を爲さるについちや、何かお二人の間に面白くないことが有つたに違ひないでせう。お二人の間柄は貴方だつて好く御存じぢや有りませんか。

ヤルマア　うむ、そりや左様かも知れん。だが——

ギイナ　して見りや、ゼルレエさんは貴方が彼の方を唆かして、何爲たんだと思ひますわ。

ヤルマア　左様思ふなら思はせて置くさ。成程、ゼルレエの親父さんは私の爲にや隨分盡して呉れた。そりや私も好く知つてる。だが、それが爲に一生彼の人の指圖を受ける譯にや行かないよ。

ギイナ　ですが、貴方、左様すりや困るのはお祖父さんでせう。如何かすると、最うグローベルクから貰つてた僅かの仕事も爲せて貰はれないかも

知れないわ。

ヤルマア　左様成りや、なほ都合が好い——と言ひたく成るね。私も男として、頭の白い親父に非人の様にうろついて廻られるのは、隨分不面目な話だからね。いや、最う間もなく運が廻つて來るよ。私は堅く左様信じて居る。（新しい麪包の片と牛酪とを取る。）私は此世に一つの使命を持つて居る、今に遣り遂げて見せるよ。

ヘード井ツヒ　えゝ左様よ、阿父様。屹度左様して下さいな。

ギイナ　靜に、お祖父さんが目をお覺しに成るぢや有りませんか。

ヤルマア　（一層小聲に成つて、）あゝ遣り遂げるとも。今に何爲さへすりや、其日が來るよ。それだから室を貸したのはいよ〳〵以て好都合だ。畢竟それだけ私が獨立出來るんだからね。此世に一つの使命を持つて居る者は、如何しても獨立してなきや成らない。（安樂椅子の傍へ寄つて、感情に充ちた聲で）

阿父さん！　大分白髪が殖えましたね。だが、何卒ヤルマアを力にして下さい。私は廣い肩を持つて居る――これでも廣い強壯な肩だけは持つて居る。貴方も未だ晴れやかな日光の中に目を覺して起上る時が御座いませう。

（と、ギイナに向つて、）お前はそれを信じないか。

ギイナ　（立上りながら、）えゝ、信じてますとも。ですが、今夜は此人を寢床へ連れて行きませうよ。

ヤルマア　うむ、ぢや來い。

二人が氣を附けて老人を持上げる。

第三幕

ヤルマア　エークダルの技術室

朝の光景。斜めに成つた屋根の大きな窓を通して、日光が輝く。帷幄は引絞つてある。ヤルマア卓に向つて忙し相に寫眞を修整して居る。其前になほ五六枚横たはる。間もなく、ギイナ帽子と外套とを着て、廊下の戸口より入來る。腕に蓋をした籃を持つて居る。

ヤルマア　最う歸つたのか。

ギイナ　えゝ、忙しいんですからね。（椅子の上に籃を置いて、外套だの帽子を脱ぐ。）

ヤルマア　お前、グレーゲルス君の室を見たかい。

ギイナ　えゝ、見て來ました。そりやア大變ですよ、貴方、來る早々滅茶苦茶なことを仕出かしてからに。

ヤルマア　本當に？

ギイナ　彼の方は何でも御自分で爲ると仰有るんですからね。屹度暖爐に火を點けやうとして、空氣留めの螺を拈り過ぎ成すつたのに違ひない。室中煙で一杯ですよ。うッふ。それが又臭いッたらなんですよ。

ヤルマア　へえ、眞個かい。

ギイナ　いえ、それ位で濟むんなら可いんですがねえ。それから彼の方は火を熄さうとして、水瓶の水を悉皆暖爐の中へ打明けなすつたんでせう。だもんだから、床が宛然豚小舍の樣にぐッしやぐしや。

ヤルマア　そりやア困つたね。

ギイナ　門番の主婦さんを喚んで來て、やつと豚の室を掃除して貰つたんですよ。ですが、午後でなくつちや迚も這入れやしませんよ。

ヤルマア　其間あの男は如何してたい？

ギイナ　えゝ、一寸の間戸外へ行つて來ると仰有いました。

ヤルマア　私もお前が出て行つてから、一寸彼の男の室を覗いて見たよ。

ギイナ　それは聞きましたよ。お茶に被入しやいッて仰有つたんでせう。

ヤルマア　なに、ほんのお茶だけに招んだのよ。彼の男も始めて來て吳れた日だからね――此方でも其位の事は爲なきや。自宅に何か有つたらう、えゝ？

ギイナ　何か見繕ひませうね。

ヤルマア　それから何だ、餘り吝嗇に爲ない方が可いよ。レリングやモルキツクも遣つて來るだらうと思ふからね。恰度梯子段のところでレリングに出逢つたんだよ、だから私もつい言つて仕舞つたのよ。

ギイナ　えゝ？　あんな人達迄招んだのですか。

ヤルマア　なに――一人や二人多いとて別に違ひはないさ。

老エークダル　（自分の室の戸を開けて覗く。）ヤルマア、ヤルマアは居るか――

（ギイナを見て、）おゝ！

ギイナ　何か欲しいんですか、お祖父様。

エークダル　あゝいや、何でもないんだよ。ふむ。（二たび戸を閉ぢて入る。）

ギイナ　（籃を取上げる。）何卒お祖父様が戸外へお出被成らない様に氣を附けて下さいよ。

ヤルマア　あゝ可いよ、〳〵。――それからね、ギイナヤ、青魚生菜も少許有つた方が可いね。レリングとモルキックとは昨宵も又飲みに出た相だよ。

ギイナ　あの人達は又用意の出來ない間に來て呉れなきや可いんですがね。

ヤルマア　なに、大丈夫來やせんよ。まア悠くり遣つて呉れ。

ギイナ　えゝ、貴方も其間些とでも可いからお仕事を爲さいよ。

ヤルマア　あゝ、遣るよ。腕のつゞく限り遣つてるよ。

ギイナ　左樣すると、貴方も早く手が空いて可いでせう、ねえ？

籃を持つて臺所へ出て行く。

ヤルマアは少時寫眞に對して仕事をして居る。それを如何にも氣の無き相に怠けて爲る。

エークダル　（技術室を覗き込んで見廻しながら小聲で言ふ。）忙しいかえ。

ヤルマア　えゝ、今これを遣つて仕舞はうと思つてね。

エークダル　左樣か〳〵、そんなに忙しけりや――ふむ！

二たび引込む、戸は開いた儘に成つて居る。

ヤルマア　（少時の間默つて仕事を續けるやがて刷毛を下に置いて、戸の傍へ行く。）忙しいんですか、阿父さん。

エークダル　（悒然とした聲で、內側から、）お前が忙しけりや、俺も忙しいんだ

よ。ふむ？

ヤルマア　あゝ左様ですね。（二たび仕事にかゝる。）

エークダル　（間もなく、二たび戸口へ現はれて、）ふむ、ヤルマアや、俺は別に忙しいと言ふ譯でもないんだよ。えゝ？

ヤルマア　貴方は寫し物をして被在しやるんでせう。

エークダル　何だ、そんな物！　グローベルクだつて一日や二日待てないこともなからう。何もそれが死生の問題ぢやないからね、えゝ、左樣ぢやないか。

ヤルマア　左樣ですとも。又貴方も彼の男の奴隷ぢや有りませんからね。

エークダル　で、其處の彼れは如何したい？

ヤルマア　其事ですよ。貴方彼處へ這入りたいんですか。戸を開けて上げませう。

エークダル　左樣だね、別段惡いこともなからうね。

ヤルマア　（立上る。）それぢや一つ遣つて仕舞ひませうか。

エークダル　そこぢやて、明日の朝迄には、如何しても遣つて仕舞はなきや成るまいね。誕生日は明日ぢやないのかい。えゝ？　ふむ？

ヤルマア　えゝ、勿論明日ですよ。

ヤルマア　エークダル滑り戸を押して開く。朝の日光は天窓を通して輝いて居る。鳩は飛び廻つて居るのも有れば、くゝと啼きながら、棟の上に棲つて居るのも有る。牝雞は室の隅の方に蹲んで、時々氣立ましく鳴く。

ヤルマア　さア阿父さん、お這入りなさいよ。

エークダル　お前も來るかい。

ヤルマア　えゝ、眞個其の何ですよ――とも思ふんですがね。（臺所の戸口にギイナが立つて居るのを見て）私？　いや、私は暇がない、仕事が有るんですか

らね――で、あの新案のからくりは――（と、綱を曳く。帷幄が内側より落つ。其の下部は帆木綿で造られ、上郡は綱を張りたる物より成る。從つて屋根裏の室の床は見えなく成る。）

ヤルマア　（卓の傍へ行つて、）あア、これで暫らく靜に仕事が出來るぞ。

ギイナ　お祖父さんは又彼處へ這入つて、ごちや〳〵遣てるんですか。

ヤルマア　だが、エリクゼンの舖へ脱出して行かれるより可いぢやないか。（下に坐る。）お前何か要るのかい。何か言つてたね。

ギイナ　えゝ、只食卓を此處へ据ゑても可いか訊きに來たんですよ。

ヤルマア　好からう。誰もそんなに早く寫しに來る約束はないだらうね。

ギイナ　えゝ、今日は彼の二人一緒に撮る若夫婦限りですよ。

ヤルマア　何だつて又他の日に延ばされないんだらうな。

ギイナ　ですが、貴方、私は貴方が寢てらつしやる間に、午後來て貰ふ樣

に云つて置いたんですよ。

ヤルマア　あゝ左樣か、そりや好い。ぢや、此處で御馳走を爲やうぢやないか。

ギイナ　えゝ、ですが左樣遣てゝ展げるにも及ばないでせう。未だ一時間位貴方が卓を使つてらしても可いんですよ。

ヤルマア　お前は私が仕事にかゝつてないと思ふのかい。これでも出來るだけ一生懸命に遣つてるんだよ。

ギイナ　左樣して下さりや、今に貴方も早く手が空くでせう、えゝ。

二たび臺所へ行く。短き沈默。

エークダル　（屋根裏の室の戸口に立つて、綱の後ろから）ヤルマアや。

ヤルマア　何です？

エークダル　如何しても水槽を動かさなきや不可んやうだね。

ヤルマア　そりやア私が始終言つてたんですよ。

エークダル　ふむ――ふむ――ふむ。（二たび戸口から去る。）

ヤルマア少許仕事をつゞく。後ろの室を眺めて、半ば立上る。ヘードヰッヒ臺所より入來る。

ヤルマア　（急いで二たび下に坐る。）何か用が有るのかい。

ヘードヰッヒ　私只阿父様のお側へ來たのよ。

ヤルマア　（少時默つて居た後、）お前は何處へでも鼻を突出して嗅いで廻るやうだね。私を見張つて居れとでも言はれたのかい。

ヘードヰッヒ　おゝ可厭だ、そんな事ないわ。

ヤルマア　阿母さんは彼處で何爲てるんだい？

ヘードヰッヒ　阿母さまは靑魚生菜（ヘリングサラダ）を拵へてらつしやる最中よ。（机の傍へ行く。）阿父（おとう）様、何か私で手傳へるやうな事なくッて？

ヤルマア　あゝいや、俺（わし）は何も彼も自分で爲る方が可いんだよ――俺の力がつゞく限りはね。ヘードヰッヒや、お前は何も心配することはないよ。只阿父さんの健康が續きさへすりや――

ヘードヰッヒ　おゝ可厭（いや）だ、阿父様。そんな可厭な話はしないで頂戴よ。

少時室の中を彷ひ歩いたが、屋根裏の室の戸口に立停つて、覗き込む。

ヤルマア　お祖父（じい）さんは何爲てだい？

ヘードヰッヒ　何だか水槽（みづおけ）へ、新しい道を造つてお坐での樣ですよ。

ヤルマア　そりやア迚（とて）もお祖父さんぢや出來やしない。と云つて、俺は此處に坐つてなきや成らんのだしね――

ヘードヰッヒ（傍へ行つて、）阿父様私に刷毛（はけ）を貸して下さいな。私上手に出來てよ。

ヤルマア　駄目だよ、眼を惡くするばかりだから――

ヘード井ツヒ　そんな事ないわ、刷毛を貸して頂戴よ。

ヤルマア（立上りながら、）うむ、そりやほんの一分間か二分間で可いんだがね。

ヘード井ツヒ　ぷッ、それぢや害に成り樣がないわ。（刷毛を取上げる。）さア！（下に坐る。）あゝ、恰度此處に私で出來るやうなのが有つてよ。

ヤルマア　だが、眼を害はない樣に氣をお附けよ。可いかい。私は知らないよ、自分の事は自分で注意しなきやアね――好く言つて置くよ。

ヘード井ツヒ（修整しながら、）えゝ〳〵解りましたよ。

ヤルマア　お前は怜悧だからね。可いかい。ほんの一分間か二分間だよ。

（と、帷幄の端から屋根裏の室へ滑り入る。ヘード井ツヒ坐つて仕事を爲る。ヤルマアとエークダルと、何か內側で議論して居るのが聞える。）

ヤルマア（網の後ろに現はれて、）おい、ヘードキツヒや――棚の上に有る其

釘拔きを取つてお呉れよ。それから鑿と。（內側に向つて、）阿父さん、まア御覽なさい。私が何を爲るか見て居て御覽なさいよ。

ヘード井ツヒ棚から賴まれた道具を持つて來て、中に居る父に手渡しする。

ヤルマア　うむ、有難う。私が手傳はなけりや、お祖父さんぢや迚も出來ないんだよ。

二たび這入つて行く。二人が話をしながら大工仕事を爲て居る聲が內側から聞える。ヘード井ツヒは立つたまゝ、二人を見て居る。忽ち廊下の戸口でほと〳〵と戸を敲く音がする。ヘード井ツヒはそれに氣が附かない。

グレーゲルス　ヴルレエ（平常着を着て、帽子を被らずに這入つて來たが、戸口に近く立停る。）ふむ――！

ヘード井ツヒ（振回つて傍へ行く。）お早う。何卒お這入り下さい。

グレーゲルス　有難う。（屋根裏の室の方を見る。）お宅は大工が入つてる樣ですね。

ヘード井ツヒ　いえ、あれは阿父様とお祖父様で御座いますの。貴方がお出に成つたと告げて參りませうね。

グレーゲルス　いえ〳〵、それには及びません。それよりも些との間かうして待つて居ませう。

長椅子の上に坐る。

ヘード井ツヒ　此處は大變取散かして居ますのよ。（寫眞を片附けやうとする。）

グレーゲルス　いや。其儘にして置いて下さい、それが是から修整する寫眞ですか。

ヘード井ツヒ　えゝ、私が阿父様のお手傳ひをして、一二枚直しかけて居たんですの。

グレーゲルス　それぢや何卒構はずに遣つて下さい。

ヘード井ツヒ　えゝ。（いろんな物を自分の傍へ寄せて、仕事に取かゝる。其間グレー

ゲルスは默つて相手を眺めて居る。）

グレーゲルス　昨夜鴨は好く寢ましたか。

ヘード井ツヒ　えゝ有難う、屹度寢たらうと思ひますわ。

グレーゲルス（屋根裏の室の方へ向きながら）昨宵月明りで見たのと、かうして日の光で見るのとは、全然光景が違ひますね。

ヘード井ツヒ　えゝ、隨分違ひますのよ。朝と午後とでも違ひますし、それから雨の降る日と天氣の好い日とでは、丸切違つて見えるんですのよ。

グレーゲルス　そんな事貴方が氣が附いたんですか。

ヘード井ツヒ　だつて氣が附かない譯には行きませんわ。

グレーゲルス　ぢや、彼處で鴨と一處に遊ぶのが所好なんですね。

ヘード井ツヒ　えゝ、出來さへすりや——

グレーゲルス　成程、貴方は澤山餘暇が有りませんね。學校へ行つてるん

でせう。えゝ？

ヘード井ツヒ　いえ、今は行つて居りませんの。私が眼を悪くしやしないかと、阿父様がそれを心配して——

グレーゲルス　あゝ。ぢや、阿父様が教へて下さるんですね。

ヘード井ツヒ　阿父様は教へて遣ると約束したんですけど、未だそれだけのお暇が無いんですの。

グレーゲルス　ぢや、誰も貴方を助けて呉れる者がないんですね。

ヘード井ツヒ　えゝ、モルヂックさんが居るんだけど、彼の人は毎もきちんとして居ないんですもの——あの——

グレーゲルス　毎も酔拂つて居るんでせう。

ヘード井ツヒ　えゝ、まア左様ですわ。

グレーゲルス　あゝ。それぢや貴方は一日中好きな事が爲て居られるんで

すね。それに彼處には夫自身一つの世界を形造つて居るやうなものが有るんでせう。

ヘード井ツヒ　えゝ、眞個なのよ。彼處にはそりやいろんな不思議な物が有つてよ。

グレーゲルス　本當に？

ヘード井ツヒ　えゝ、本の一杯詰つた大きな戸棚が有つてよ。繪の附いた本も澤山有つてよ。

グレーゲルス　左樣！

ヘード井ツヒ　それに抽斗や扉の着いた書擡も有つてよ、數字が出て來る樣に成つた大きな掛時計も有つてよ。けど、それは最う動かないわ。

グレーゲルス　左樣すると、彼處ぢや——鴨の領國ぢや、時間がぴたりと停つて進まないのですね。

ヘード井ツヒ　左様なの。それに古い繪具箱も有れば、そんな様な物が澤山有つてよ。それにいろんな本も。

ゲレーゲルス　ぢや、貴方は其本を讀むんですね。左様でせう。

ヘード井ツヒ　えゝ、左様なのよ――出來さへすればね。ですが、其本は大抵英語なんですもの、そして私は英語が解らないんですもの。けど繪だけは見ますのよ。――ハリソンの『倫敦史』と云ふ、大きな本が一冊有るのよ、何でも百年位經つてるんですッて、其中には隨分澤山繪が有つてよ。始めに漏刻を持つた死の神樣と一人の少女が附いて居てよ。私何だか怖らしい樣だわ。ですが、其外にも教會だの、お城だの、街だの、大きな船が海の上を駛つて居るところだの、そりやアいろんな繪が着いて居てよ。

ゲレーゲルス　一體そんな不思議な物が何處に有つたのですか、えゝ？

ヘード井ツヒ　えゝ、そりや何日か此處にお老父さんの船長が住んで居ま

したのよ。悉皆其人が持つて來たんですの。其人をね、皆して『飛んで行く和蘭人』と言ひ〳〵しましたわ。それが可訝しいのよ、其人は和蘭人ぢやないんですもの。

ゲレーゲルス　左様ですか。

ヘード井ツヒ　左様なのよ。ですが、其人は到頭居なく成つて仕舞つたの。そして、後にいろんな物を殘して行きましたのよ。

ゲレーゲルス　それで何ですかい、貴方は左樣云ふ繪を見て居ると、自分も世界を廻つて見物して歩きたいと思ふやうなことは有りませんか。

ヘードキツヒ　いゝえ、私は何時迄も自宅に居て、阿父樣や阿母さまの手助けを爲るつもりで居ますのよ。

ゲレーゲルス　寫眞の仕上げをして？

ヘードキツヒ　いえ、そればかりぢや有りません。私は何よりも一番其英

語の本に有るやうな繪を彫刻することがおぼえたいんですけれど。

グレーゲルス　ふむ。阿父様は何と言はれるのですか。

ヘードキツヒ　阿父様は何うも不可ないらしいのよ。左様云ふ事に成ると、眞個變ですわ。私に籃細工をおぼえろだの、麥藁細工を習へだのと云ふんですもの！　ですが、そんな事を爲たつて、幾許にも成るものぢやないでせう。

グレーゲルス　左様ですね、私も左様思ひますね。

ヘードキツヒ　ですが、私が籃細工をおぼえたら、鴨に新しい籃を造つて遣れると仰有つたのは、成程阿父様の仰有る通りだと思ひますわ。

グレーゲルス　そりやア造つて遣るが可いですね。それに又、嚴密に言へば、貴方の仕事ぢや有りませんか。左様でせう。

ヘード井ツヒ　えゝ、あれは私の鴨ですからね。

グレーゲルス　勿論左様です。

ヘード井ツヒ　えゝ、私のよ。だけど、阿父様やお祖父様には好きなだけ貸して上げるんですの。

グレーゲルス　一體、あの人達はそれを如何するんですか。

ヘードキツヒ　えゝ、それはあの面倒を見て遣つたり、鴨の居る場所を造つて遣つたりするんですわ。

グレーゲルス　成程、鴨はあの屋根裏に棲んでるものゝ中ぢや、一番立派な鳥ですからね。左様でせう。

ヘードキツヒ　えゝ、眞個左様なのよ。御存じの通り、鴨は野禽ですものね。ですが、隨分可哀相なんですの。あの鴨は自分で育てゝ遣るものが無いんですもの、氣の毒ですわね。

グレーゲルス　兎なぞの様に家族がない——と言ふんですか。

ヘーデ井ッヒ　えゝ、牝雞だつて大抵雛子と一緒に居るのよ。それに鴨だけは自分の子や孫から引離されて來たんですもの。彼の鴨については、隨分不思議な事が有つてよ。誰も彼の鴨を知らないんですものね、何處から來たと云ふことも知らない。

グレーゲルス　海の深みに居たと云ふぢや有りませんか。

ヘーデ井ッヒ　（遽てゝ相手を見遣りながら、微笑を押隱して訊れる。）何故『海の深み』なぞと仰有るの？

グレーゲルス　ぢや、如何言ふんです？

ヘーデ井ッヒ　『海の底』と言つた方が可いわ。

グレーゲルス　海の深みと言つたつて、別に差支はないでせう。

ヘーデキッヒ　ですが、他の人が海の深みと言つたりなんかすると、私には可笑しく聞えるんですもの。

グレーゲルス　如何して？　所以をお話しなさいな。

ヘーデ井ッヒ　いえ、爲ますまい。何だか莫迦らしいんですもの。

グレーゲルス　いゝえ、そんな事は有りませんよ。何故笑つたのか話して下さいな。

ヘーデ井ッヒ　えゝ、斯う云ふ譯ですの。私はね、不意に――稲光の樣に――彼處に在る物が眼に見えることが有るんですよ。左樣すると、毎でも彼の室も室の中に在る物も、悉皆『海の深み』と云ひたいやうな氣が爲ますの――何だか莫迦々々しんですわね。

グレーゲルス　いや、そんな事はない。

ヘーデ井ッヒ　だつて、あれは唯屋根裏の室なんですもの。

グレーゲルス　（凝乎と相手の顏を見詰めながら、）貴方は本當に左樣思つてるんですか。

ヘード井ツヒ　（驚かされて、）屋根裏の室と云ふことですか。

グレーゲルス　確に左様信じて居るんですね。

ヘード井ツヒ沈默して、惘れながら相手の顏を見返して居る。ギイナ食卓の上に並べる物を持つて、臺所より入來る。

グレーゲルス　（立上りながら、）餘り早く伺つた樣ですね。

ギイナ　えゝ、一寸何處かへ行つて居て下さると可いんですが――いえ、最う彼是用意が出來ます。ヘードキツヒや、卓を片附けてお呉れ。

ヘード井ツヒいろ〳〵な物を片附ける。次の會話の間、ギイナと二人して卓に布片を掛ける。グレーゲルスは安樂椅子に坐つて寫眞帳を飜つて居る。

グレーゲルス　奥さん、貴方は寫眞の修整がお出來だ相ですね。

ギイナ　（横目に見ながら、）えゝ、遣りますのよ。

グレーゲルス　そりや至極好都合ですね。

ギイナ　何が好都合で御座いますか。

グレーゲルス　エークダル君が寫眞師だからと云ふんですよ。

ヘード井ツヒ　阿母さまは寫眞も撮れますのよ。

ギイナ　えゝ、私はそれも自分で遣らなけりや成らんので御座います。

グレーゲルス　左樣すると、何ですか、實際は貴方が此職業を遣つて被坐しやるんですね。

ギイナ　えゝ、エークダルが自分で暇のない時には――

グレーゲルス　成程、あの男は阿父さんのことばかり氣に掛けて居るんでせう。何うも、左樣に違ひない。

ギイナ　えゝ、それも左樣ですが、エークダルも其邊に居る町の衆の寫眞を撮る外に、能のない男でも御座いませんからね。

グレーゲルス　それは貴方の仰有る通りです。が、併し一度職業とした上

は――

ギイナ　ゼルレエさん、御存じでせうが、エークダルも普通の寫眞屋ぢや御座いませんからね。

グレーゲルス　勿論、左樣です。が、如何しても――

屋根裏の室に鐵砲の音聞ゆ。

グレーゲルス（飛上りながら、）ありや何です？

ギイナ　うツふ？　又二人が打つてるんで御座いますよ。

グレーゲルス　彼處に鐵砲なぞ有るんですか。

ギイナ　え、、獵に行つたのでせう。

グレーゲルス　何ですツて？（屋根裏の室の戸口へ行つて、）ヤルマア君、君等獵をして居るんか。

ヤルマア（網の內側から、）君は其處に居たのか。些とも知らなかつた。餘り

此方へ氣を取られて居たもんだからね――（ヘード井ツヒに向つて、）お前は又何故知らせないんだい。（技術室に入來る。）

グレーゲルス　屋根裏で獵をするのかい。

ヤルマア（二重銃身の短銃を見せながら、）なに、これだよ。

ギイナ　え、、貴方もお祖父さんも、今に其短銃で飛んだ負傷をしますよ。

ヤルマア（苛々して、）かう云ふ鐵砲はピストルと云ふんだと敎へて置いたぢやないか。

ギイナ　え、、何方にしたつて駄目ですよ。

グレーゲルス　それぢや君も銃獵家に成つたんだね、ヤルマア君。

ヤルマア　なに、ほんの時偶兎を打つて見るだけよ。それも主に親父の氣の保養でさ。

ギイナ　男と云ふものは妙ですね。毎も何か知ら氣をはぐらかすやうな

ことをしてなきや居られんのですからね。

ヤルマア　（肝癪聲で、）左様よ、男と云ふものは何か氣を紛らすものが無けりや成らんのだよ。

ギイナ　左様ですよ、私も左様言いつたのですよ。

ヤルマア　ふむ。（グレーゲルスに向つて、）幸ひに彼の室は鐵砲を打つても他所へは聞えない様に成つてるんだよ。（書棚の最上の棚に短銃を載せて、）ヘードキツヒや、あの短銃に觸つちや不可いよ。未だ片方に彈丸が込つてるんだからね、可いかい。

グレーゲルス　（網越しに眺めながら、）見りや、獵銃も有るんだね。

ヤルマア　あれは親父の古い銃だよ。今は最う役に立たんのさ、何處か引金の工合が惡く成つてね。それでも時々出して來て、細かく分解したり、それを磨いて、又元の様に組立てゝ見たりするもんだから、矢張玩具には

成るさ。勿論、そんな事をして悞しむのは、大抵親父だがね。

ヘードヰツヒ　（グレーゲルスの側で、）恰度今鴨が好く見えますよ。

グレーゲルス　私も見てるんですよ。何うも片方の羽翼を下げて居るやうですね。

ヘードヰツヒ　そりやア左様ですわ、あれは傷をしたんですもの。

グレーゲルス　それに一つの足を引摺るやうだね。左様ぢやないか。

ヤルマア　あゝ、ほんの少許だよ。

ヘードヰツヒ　えゝ、あの足を犬が咬へたんですのよ。

ヤルマア　だが、其外には、何處一つ不自由な所はないんだよ。まア身體に彈丸を受けて、犬の齒で咬へられたものとしちや、實際不思議だと言はなくちや成らんのだね——

グレーゲルス　（一目ヘードヰツヒを見遣つて、）——それに、隨分長く——海の

深みにも居たんでせう。

ヘード井ッヒ　左様なの。

ギイナ　（食卓の上へ並べながら、）まア仕合せな鴨だねえ。貴方がたは隨分鴨の話ばかりして被坐しやるよ。

ヤルマア　ふむ――最う仕度が出來るかい。

ギイナ　えゝ、直きですよ。ヘードキッヒや、最う來て手傳はなきや不可ませんよ。

ギイナとヘード井ッヒと臺所へ行く。

ヤルマア　（低い聲で、）其處に立つて見て居て呉れない方が可いよ。親父は可厭がるからね。

グレーゲルス屋根裏の室の戸口を去る。

ヤルマア　又他の連中が來ない間に閉めて置いた方が可からう。（手を拍つ

て、家禽を追ひ遣る。）しッ――しッ、――さア中へ這入れ？（帷幄を引上げて、戸を兩方から閉める。）こんな仕掛けは悉皆僕が發明したんだよ。實際、こんな物をぼつ〳〵造つたり、壞れたら又直したりしてるのは、娯しみなものだね。それに、眞個必要でも有るんだよ。技術室へ兎や庭鳥の這入つて來るのは、ギイナが大反對だからね。

グレーゲルス　そりやア當前だね。何うも此家を切廻して居るのは、君の細君らしいね。

ヤルマア　あゝ、細々したことは大抵彼女に遣らせて置くよ。左様すりや、僕は寢室へ逃げて、最と重要な事を考へて居られやうと云ふもんだからね。

グレーゲルス　そりやヤルマア君、何だい？

ヤルマア　君が最少し早くそれを訊いて呉れないのは可訝しいね。だが、

未だ發明の事について聞かないのかい。

グレーゲルス　發明？　いゝえ。

ヤルマア　實際？　君が聞かない？　あの何だぜ、山の上でだぜ――

グレーゲルス　それぢや、君は何か發明したのかい、えゝ？

ヤルマア　未だ出來上りはしないさ。だが、遣つてることは遣つてるよ。僕も寫眞術に身を委ねたからには、其邊に居る普通の人間を寫す外に、一生何も爲ずに終るつもりでもないんだよ。それ位の事は君も察して呉れさうなものだね。

グレーゲルス　いや、恰度今君の細君もそれと同じ様な事を言つてたよ。

ヤルマア　僕は此職業のために全力を捧げて、これを一つの藝術とし、一つの科學とする迄に向上せしめやうと誓つたのだ。そこで此大發明を自分で仕遂げやうと決心したんだよ。

グレーゲルス　で、其發明と云ふのは如何云ふんだい？　一體何を爲やうと云ふんだね？

ヤルマア　あゝ君、未だそんな細かい點迄訊いては不可ないよ。何しろ時間を要する仕事だからね。それに又僕の動機が虚榮心にあると思つて呉れても困るんだ。僕が遣つて居るのは、自分の爲ぢやないんだよ。あゝいや、日夜僕の前に立つて立去らないものは、僕の生涯の使命だよ。

グレーゲルス　其生涯の使命と云ふのは何だい？

ヤルマア　君は彼の頭髪の白い老人を忘れて呉れたのか。

グレーゲルス　君の阿父さんか。だが、君は彼の人に對して何を爲るんだい？

ヤルマア　僕は二たびエークダルの家名を上げて、親父の自尊心を甦らせやうと云ふんだよ。

グレーゲルス　で、それが君の生涯の使命なんだね？

ヤルマア　左様だ。僕は破船した人を救はうと思つてるんだよ。あれで親父は暴風雨の最初の一吹きで破船したやうなものだからね。未だあの怖しい審問が續行してる間からして、親父は最う元の親父ぢやなかつたのさ。其處にある彼の短銃も――僕等が今兎を打つのに使つてる、あれだね――あれもエークダル家の悲劇中にあつては、或役を勤めて居るんだよ。

グレーゲルス　短銃？　實際かい。

ヤルマア　禁錮の判決が下つた時に――親父は手に彼の短銃を握つたのだよ――

グレーゲルス　阿父さんが――？

ヤルマア　あゝ、だが親父はそれを使ひは爲なかつた。勇氣がなかつたんだね。あの時ですら、それ程迄に氣力も衰へ精神も墮落して居たんだよ。

えゝ君！　君はそれが了解出來るかい。あの親父だよ。軍人だよ。一度は九匹の熊を射つたおぼえもある、又先祖には二人迄中佐のある、あの親父がだよ――勿論、そりや代々の中にだがね――グレーゲルス君、君はそれが了解出來るかい。

グレーゲルス　左様、僕は好く了解出來るね。

ヤルマア　僕には出來ない。それに最一度短銃は僕の家の歴史に於て、或役を演じたのだよ。親父が柿色の着物を着て、手錠と鏈で繋がれて居た間と云ふものは――あゝ、實際僕に取つては堪らない月日だつたよ。僕は毎日窓の戸を二つながら卸して置いた。偶さか戸外を覗いて見ると、日は平常の通り輝いて居る。僕にはそれが解らなかつた。他人は又詰らない事を笑つたり饒舌つたりしながら、街の上を歩いて居る。僕にはそれも解らなかつた。畢竟、日蝕でも起つた樣に――森羅萬象一時に運行を休止したか

の様に、僕には思はれたんだね。

グレーゲルス　僕も母が死んだ時には、そんな氣がしたよ。

ヤルマア　其時に、ヤルマア、エークダルは短銃を胸に當てたのだ。

グレーゲルス　君も亦そんな考へを——

ヤルマア　あゝ。

グレーゲルス　併し君は其引金を引きは爲なかつたんだね？

ヤルマア　いや。其最後の瞬間に於て、僕は僕自身の上に勝利を得た。僕は生き殘つた。だが、左樣云ふ事情の下に生を選ぶと云ふことは、實際或程度の勇氣を要するものだよ。

グレーゲルス　うむ、そりやア其人が生を如何考へて居るかと云ふことに依つて決まるだらうね。

ヤルマア　眞個其通りだよ。併しそれが好かつたんだね。間もなく、僕の

發明も完成するし、左樣成りや又、レリング醫師の言ふ通りに——僕も左樣思ふがね——親父も二たび制服着用を許される樣に成るだらうしね。僕は唯一の報酬として、それを願つて見るつもりだよ。

グレーゲルス　それぢや阿父さんが制服について何とか言はれたのは、それなんだね？

ヤルマア　あゝ、それが親父の一番熱望して居る所だよ。僕が何の位親父のために心を苦しめて居るか、君には想像も着くまい。此家で何か一寸した祝ひ事が有ると——例へば、僕がギイナと結婚した日だとか、其外何でも可い——其たんびに彼の老人は昔着た制服を着けて這入つて來るんだよ。だが、一寸でも入口の戸を敲く者があると——親父はそれを着て他人の前に出ることを敢て爲ないからね——遽てゝ彼のよろ〳〵した足を引摺りながら、室へ駈込むんだよ。ねえ君、子としてこんな態を見せられるの

は堪らないものだよ。

グレーゲルス　で、君が其發明を仕上げるには、何の位日日がかゝる心算だい？

ヤルマア　いや、君の樣に左樣日限迄訊かれても困るよ。發明と云ふものは左樣自分の心の儘に成るものぢやないからね。大部分は懸つて直覺に有る――インスピレーションに有るんだね。從つて何日インスピレーションが來るかと云ふことは、殆ど豫言することが出來ないぢやないかね。

グレーゲルス　併し進行はしてるんだらう？

ヤルマア　左樣、確に進行はして居るよ。僕は毎日頭の中でそれを揑返して居る、それで一杯に成つて居るよ。毎日午後は、晝飯が濟んでから、寢室に閉籠つて居るよ。彼處は落着いて考へられるからね。だが、僕は他人から刺擊される質ぢやない、そんな事を爲たつて役に立たんよ。レリング

も左樣言ふがね。

グレーゲルス　それに屋根裏であんな事をしてりや、隨分時間も費えるし、邪魔にも成るだらう。

ヤルマア　いや〳〵、そりやア全く反對だよ。そんな事を言つちや不可ない。僕だつてのべつ幕なしに同じ緊張した考へをつゞけて居る譯には行かんよ。偶に休む時は、又それを充すやうな別な物が無きやアね。インスピレーションと直覺、ねえ君――左樣云ふものは來る時には來る、それが來さへすりや、我事成れりだ！

グレーゲルス　ヤルマア君、何うも君は君自身の中にも鴨の或物を持つてるやうだね。

ヤルマア　鴨の或物？　そりや何だい？

グレーゲルス　君は君自身海の底へ藻操つて、碇り藻に咬ひ込んで居るん

だよ。

ヤルマア　ふむ、君は親父の翼を破り――又僕の翼を破つた、あの生命にも係るやうな一撃について言つてるのかい。

グレーゲルス　全然それでもないさ。僕は君が傷を受けたとは言はんよ。だが、ヤルマア君、君は毒氣のある沼へ迷ひ込んだのだよ。君の身體には疾病が潜伏して居る、君は闇の中で死ぬために底へ藻掻り込んだのだよ。

ヤルマア　僕が！　闇の中で死ぬ？　グレーゲルス君、實際そんな話は罷めて呉れ玉へ。

グレーゲルス　心配することはない、僕が二たび君を救つて見せるよ。僕も今は世に一つの使命を持つて居る。昨日それを發見したのだ。

ヤルマア　そりやア大いに好い。だが、何卒僕のことは打捨つて置いて呉れ玉へ。君に言つて置くがね――勿論、誰にも解つてる憂鬱は別として――

僕はこれで人並には滿足してるんだからね。

グレーゲルス　其滿足は沼氣に中てられた結果だよ。

ヤルマア　いや、グレーゲルス君、最うそんな疾病だの毒だのと云ふ話は賴むから罷めて呉れ玉へ。左樣云ふ話には、僕は慣れて居ないよ。僕の家ぢや、誰も僕に對して不快なことを言ふ者はないからね。

グレーゲルス　成程、それは左樣らしいね。

ヤルマア　左樣云ふ話は僕に好くないんだよ、ねえ君。それに君の言ふやうな沼氣なんてえものは、此家に有りはしないよ。あはれな寫眞師の屋根は低い、それは僕も好く知つてる――僕の身上もそりや小さなものさ。だが、僕はこれでも發明家だよ、又一家の主人だよ。それを思ふと、僕は賤しい周圍の上に高められるんだよ――あゝ、やつと仕度が出來たね。

ギイナとヘード井ツヒとして、麥酒の瓶だのブランディの壺だの、洋盃其他の物を持

ち來る。同時に、レリングとモルギツクの兩人廊下より入來る。二人とも帽子も外套もなし。モルギツクは黑い服を着て居る。

ギイナ　（食卓の上にいろ〳〵並べながら、）あゝ、貴方がたは恰度好い所へ來て下さいました。

レリング　モルギツク君が青魚生菜（ヘリングサラダ）の臭ひがすると言出したんですよ。それを嗅いぢや靜乎（ぢつ）として居られない男ですからね。や、エークダル君、又お早う。

ヤルマア　グレーゲルス君、モルギツク君と醫師のレリング君とを紹介しやう——いや、君はレリング君を知つて居たんだね。

グレーゲルス　あゝ、一寸ねえ。

レリング　いや、エルレエの若旦那ですか。左樣だ、僕等はヘエダルの山奥ぢや、時々出會してお互に知合つた間柄（なか）だからね。何時此處へ引越して

被（い）入したんですか。

グレーゲルス　えゝ、今朝引越して來ました。

レリング　私とモルギツクとは恰度（ちやうど）貴方の室の下に居ます。ですから醫者と坊主が御入用の節は遠方迄（いらつ）被行しやらなくとも、つい手近で間に合ひますよ。

グレーゲルス　有難う、又お願ひ申すかも知れません。昨宵（ゆうべ）も十三人食卓に着きましたからね。

ヤルマア　あゝ、如何したんだね、又不快（いや）な話を持出して吳れ玉ふな。

レリング　エークダル君、安心し玉へ、若し運命の手が君を指して居るんなら、僕が代りに首を縊つて遣るかねね。

ヤルマア　僕は家族が有るから、御免蒙るよ。まア諸君坐つて喰ひ且つ飲んで吳れ玉へ、一つ愉快に遣らうぢやないか。

グレーゲルス　君の阿父さんは待つて居なくとも可いのかい。

ヤルマア　なに、親父は後に持つて行つて遣るからね。さア何卒！

一同食卓に着いて、飲み且つ喰ふ。ギイナとヘード井ツヒとは出たり這入つたりして給仕をして居る。

レリンゲ　奥さん、昨日モルギック君が怖しく醉拂ひましてね。

ギイナ　左樣ですか、昨日も亦？

レリンゲ　昨夕私が自宅へ連れて來た時に、此男が騷いだのを聞いて被坐しやいませんでしたか。

ギイナ　いゝえ、聞きません樣でしたね。

レリンゲ　そりやア好う御座んした。昨夜は眞個可厭に成りましたからね。

ギイナ　本當ですか、モルギックさん。

モルギック　昨夜の事は一切言つッこなしに願ひますよ。彼樣云ふ始末は僕の最つと善い方面とは全然懸離れて居るんですからね。

レリンゲ（グレーゲルスに向つて、）此男にはそれが何か憑物でもする樣に遣つて來るんですよ。左樣すると、私を飲みに引張出すんですがね。いや、モルギック君と來たら、眞個惡魔の樣ですよ。

グレーゲルス　惡魔？

レリンゲ　左樣です、惡魔ですよ。

グレーゲルス　ふむ。

レリンゲ　それに此惡魔てえ奴は世の中が眞直に歩けないんですからね。時々何方かへよろ〳〵と曲つて歩かなくッちや成らない。――時に、貴方は矢張山で彼の可厭な汚ない仕事にくつ着いて居られるんですか。

グレーゲルス　今迄彼處にくつ着いて居ましたよ。

レリンゲ　で、貴方が持ち廻つて居られた請求書はいよ〳〵取立てるやうな運びに成つたのですかい。

グレーゲルス　請求書？（了解する。）あゝ、あれですか。

ヤルマア　グレーゲルス君、君は請求の取立なぞして居たのか。

グレーゲルス　なに、詰らない。

レリンゲ　だが、眞個遣つたのよ。此人は一軒々々職人の小舍を訪ねて、所謂『理想の要求』なるものを說いて廻つたもんだ。

グレーゲルス　あの頃は私も若かつたからね。

レリンゲ　そりや仰有る通りだ。實際貴方は若かつたよ。それで、『理想の要求』は如何成りましたい――私が山に居た間は一度も成功しなかつた樣だが。

グレーゲルス　其後も成功しませんね。

レリンゲ　あゝ、それぢや貴方も些とは割引するだけの智惠が附きましたね。左樣でせう。

グレーゲルス　いや、眞に人間らしい人間の前に立つては、決してそんな事は爲ませんよ。

ヤルマア　成程、そりや眞個道理のある言葉だね――ギイナや、牛酪を少許持つて御出で！

レリンゲ　序にモルキツク君の許へ燻肉を一片願ひます。

モルギツク　うツふ！　燻肉は最う澤山ですよ。

屋根裏の戸口でほと〳〵敲く音がする。

ヤルマア　ヘードキツヒや、戸を開けてお上げ、阿父さんが出て來たいんだらうから。

ヘード井ツヒ側へ行つて、戸を少し開けて遣る。エークダル生々しい兎の皮を下げて

入來る。其後から娘が戸を閉める。

エークダル　諸君、お早う。今日は好い獵をしたよ。こんな大きなのを打つた。

ヤルマア　私が行く前に皮を剝いたんですね！

エークダル　うむ、鹽にも漬けたよ。ありやア和かい好い肉だ、兎はね。却々美味しいものだよ、砂糖の樣な味がしてね。諸君、澤山喫つて吳れ玉へ。

自分の室へ這入る。

モルギツク　（立上りながら、）御免下さい――僕は最う――早く階下へ行かなけりや――

レリング　曹達水でも飲み玉へ、おい！

モルギツク　（急いで立去りながら、）うふ――うッふ！

廊下の戸口を出て行く。

レリング　（ヤルマアに向つて、）あの老銃獵家のために滿を引かうぢやないか。

ヤルマア　（レリングと盃を合せながら、）墓の緣に立つて居る豪膽な人のために！

レリング　灰色の頭のために――（と、飲む。）おい、あの頭髮は一體白いのか灰色なのか。

ヤルマア　兩方の間だと思ふがね。何方にしても、餘り澤山は殘つて居ないよ。

レリング　なに、假髮を被つても世の中は通るさ。要するに、君は仕合せなんだよ。ねえエークダル君、君は此世の中にそれを目的として奮鬪する高尙な使命を持つて居るんだからね――

ヤルマア　又實際、僕は奮闘して居るよ。

レリング　それに君はあの立派な細君を持つて居るよ。毛氈で出來た上履を穿いて、こそ〳〵出たり這入つたりしながら、君の周圍を齊然と坐心地好くして呉れる、あんな細君があるからね。

ヤルマア　左樣、ギイナや（と、顎で麾いて、）お前は人生の好い道伴侶だよ。

ギイナ　不可ませんよ、そんな所で私を批評してちや。

レリング　それに、エークダル君、あのヘードキツヒも有る。

ヤルマア　（感動して、）子供も、左樣だ。何よりも子供だ。ヘードキツヒや、此處へお出でな。（娘の髪を撫でゝ遣る。）明日は何の日だつたね、えゝ？

ヘードキツヒ　（父を搖りながら、）阿父樣、何も仰有つちや不可ないのよ。

ヤルマア　だが、それも何んなに乏しいことかと思ふと、俺は此胸が張裂けるやうな氣がするよ。只、此屋根裏の室で小さな內祝ひをする——

ヘードキツヒ　だつて、私はそれが所好なんだもの！

レリング　まア彼の驚くべき大發明が出來上る迄待つさ、ねえヘードキツヒ！

ヤルマア　眞個左樣だ！　左樣成りや、お前も——！　ヘードキツヒや、俺は如何してもお前の將來を安全にするよ。お前は一生安樂に暮させて上げるよ。俺はお前の爲なら何んな事でも要求する。それが憐れな發明家の唯一の報酬だらうよ。

ヘードキツヒ　（父の頸に腕を廻して囁く。）阿父樣、本當に好い阿父樣だわねえ。

レリング　（グレーゲルスに向つて、）如何です、貴方も偶には家庭團欒の間に來て、御馳走振りの行屆いた食卓に就くのも愉快だとは思ひませんか。

ヤルマア　左樣だ、僕は眞個かう云ふ風な交際を喜ぶよ。

グレーゲルス　僕自身としては、沼氣の中で昌へたくはないね。

レリング　沼氣とは？

ヤルマア　あゝ、又そんな話を始めて呉れちや困るよ。

ギイナ　ゼルレエさん、此家にはそんな惡い臭ひなんざ些とだつて有りませんよ。私は毎日風通しを好くして置きますからね。

グレーゲルス（食卓を離れる。）風通しを好くした位ぢや、私の云ふ汚點は拔けませんよ。

ヤルマア　汚點だつて？

ギイナ　貴方、あんな事を言はれて默つて居るんですか。

レリング　お言葉の中ですが、山奥の穴の中から汚點を持つて來たのは、貴方御自身ぢや有りませんか。

グレーゲルス　僕が此家へ持つて來たものを汚點だなぞと云ふのは、如何にも君らしいよ。

レリング（つか〳〵と相手の傍へ行つて、）ゼルレエの若旦那、君に有樣を言つて聞かせませう。僕は君が上衣の尻の衣嚢の中に、未だ彼の『理想の要求』を元の儘持ち廻つて居られやしないかと、大ひに疑つて居るんだよ。

グレーゲルス　僕はそれを僕の胸に持つて居る。

レリング　ふむ、それは何處に持つて居られるにもせよだ、君に忠告するがね、僕が此家に居る間は、それを持つて餘り喧ましく取立に來ん樣にし玉へ。

グレーゲルス　で、僕がそれでも爲ると言つたら？

レリング　其時は梯子段から突落して上げるよ。それで解つたかい。

ヤルマア（立上つて、）まアさ、レリング君！

グレーゲルス　左樣か、ぢや一つ突落して呉れ玉へ——

ギイナ（二人の間に這入つて、）レリングさん、そんな事をして下すつちや困

りますよ。だがヱルレエさんも御自分ぢや暖爐であんな騒ぎを被遊して置いて、沼だの汚點だのと仰有るのは些とお口が過ぎるぢや有りませんか。

廊下の戸口に案内の音。

ヘード井ツヒ　阿母さま、誰方か見えましたよ。

ヤルマア　こりや愈々何んな奴が遣つて來るか知れないぞ！

ギイナ　私が行つて見ませう——（つか〳〵と行つて戸を開ける、思はず飛上りながら、後へ退る。）まア——まア貴方でしたか。

ヱルレエ　御免下さい。えゝ、此方へ伴が參つて居ませんでせうか。

ギイナ　（ほつと息を吐きながら、）お坐で御座います。

ヤルマア　（後へ近づいて、）貴方も何卒私どもの會に——

ヱルレエ　有難う、俺は只一寸伴に用が有つて來たので——

グレーゲルス　何ですか。私は此處に居ますよ。

ヱルレエ　お前の室へ行つて話したいね。

グレーゲルス　私の室？——宜しい——（行かうとする。）

ギイナ　いえ、貴方のお室は未だお客様を入れる様には——

ヱルレエ　それぢや廊下でも可い。只一言お前に言ひたいだけだから——

ヤルマア　此處でお話をして頂いても可いのですよ。レリング君、寢室の方へ來て呉れ玉へ。

ヤルマアとレリング右手へ去る。ギイナはヘード井ツヒを伴れて臺所へ入る。

グレーゲルス（短き間ありて後、）さ、最う二人限りです。

ヱルレエ　昨宵お前が口走つた所から察して見ても、又かうしてエークダルの家へ宿を取つた所から見ても、お前は何か俺に對して敵意を持つた計畫を立てゝ居るのだと思はない譯には行かんがね。

グレーゲルス　私はヤルマア、エークダルの目を開けて遣らうと思ふので

す。彼の男は彼の男の地位を有の儘に見なければ成りません――それだけの事です。

ゼルレエ　それが昨日言つたお前の人生に於ける使命なんだね？

グレーゲルス　左様です。其外貴方は私に何も殘して下さらなかつたのです。

ゼルレエ　グレーゲルスや、それぢやお前の心を不具にしたのは俺なんだね。

グレーゲルス　貴方は私の全生涯を不具にしたのです。私は阿母さんの事を言つてるんぢや有りません――併し私が絶えず良心の苛責を受けて、一日も安んじて居られない様に成つたのは、皆貴方のお蔭です。

ゼルレエ　あゝ、お前は良心が疼しいと云ふのだね、左様か。

グレーゲルス　私はあの時から貴方に反對して立たなけりや成らなかつた

のです、エークダル中尉に對して陷穽が設けられた時からですよ。私はそれを悟つた時からして、彼の人を警戒して遣らなけりや不可なかつたのです。

ゼルレエ　左様だ、言ふなら其時だつたね。

グレーゲルス　私にはそれが出來なかつた。それ程卑怯な勇氣のない男でした。其當時ばかりでない、ずつと後迄、私は死ぬ程貴方を怖れて居たのですよ。

ゼルレエ　今は其恐怖に打勝つことが出來たらしいね。

グレーゲルス　幸ひに出來ました。私及び――其他の者に依つて、老エークダルの上に蒙らされた損害は、最う如何しても償ふことが出來ない。併しヤルマアは私が救ひます、あの男を敗殘の淵へ沈めやうとして居る虚僞と騙詐の中から救ひ出して見せます。

ゼルレエ　お前はそれで彼の男に親切を盡して居るつもりかい。

グレーゲルス　私は堅く左様信じて居ます。

ゼルレエ　お前は彼の寫眞師を、そんな親切を喜ぶ人間だと思つて居るのかい。

グレーゲルス　左様です、思つて居ます。

ゼルレエ　ふむ、まア見て居やうね。

グレーゲルス　それに、私はこれから生きて行かうと思へば、私の疼しい良心を如何かして癒す方法を見出かして試つて見なけりや成りません。

ゼルレエ　そりや迚も駄目だね。お前の良心は子供の時分から病氣なんだからな。それがお前の母の遺産だよ――グレーゲルスや、お前の母が遺して置いた唯一の遺産だよ。

グレーゲルス（冷笑しながら、）貴方は御自身の見當違ひで、阿母さんの財産

を手に入れ損なつたと言つて、大層憤つて居られたやうだが、未だ其腹が癒えないのですか。

ゼルレエ　そんな取返しの附かない事は言はないことさ。――で、お前は何處迄も寫眞師のエークダルをお前が正しいと信じて居る道へ連出さうと云ふ量見なんだね。

グレーゲルス　左様です、私は堅く決心しました。

ゼルレエ　左様か、それぢや俺は來んでも可かつたのだ。勿論、お前は俺と一緒に自宅へ歸つて呉れと賴んで見たところで無駄だらうからね。

グレーゲルス　勿論無駄です。

ゼルレエ　それでは會社にも入らぬ積りだらうね。

グレーゲルス　入りません。

ゼルレエ　好からう。だが、俺は再婚しやうと思つて居るから、財産の幾

分は直きお前の手へ入るよ。（註日、諸威の法律に據れば、寡夫が再婚するには、其財産の幾分を初婚の妻によつて生れた子供等に分けて遣らなければ成らぬと云ふ。）

グレーゲルス　（急いで、）いえ、そんな物は欲しく有りません。

ゼルレエ　欲しくない？

グレーゲルス　私の良心が許さないのです。

ゼルルエ　（少時默つて居た後、）お前は又仕事場へ行くのかい。

グレーゲルス　いえ、私は最う貴方に使はれることは放免されて居る積りです。

ゼルレエ　ぢや、何を爲る氣だい？

グレーゲルス　只私の使命を果すのです。其外に何も有りません。

ゼルレエ　いや、それから後だよ。何を爲て暮す積りなんだい？

グレーゲルス　私の月給の中から少許づゝ貯蓄して置きましたからね。

ゼルレエ　それが何時迄續くものでも有るまい。

グレーゲルス　私が死ぬ迄續くでせうよ。

ゼルレエ　何だつて？　そりや如何云ふつもりだい？

グレーゲルス　其外言ふことは有りませんよ。

ゼルレエ　それぢや、左樣なら。

グレーゲルス　左樣なら。（ゼルレエ出て行く。）

ヤルマア　（外から覗きながら、）阿父さんは歸られたんだね。

グレーゲルス　あゝ。

ヤルマアとレリング入る。ギイナ、ヘード井ッヒ二人も臺所より出づ。

レリング　お茶の會は失敗だつたね。

グレーゲルス　ヤルマア君、上衣を着玉へ。僕と一緒に遠方迄散歩して呉れないか。

ヤルマア　あゝ可いよ。阿父さんは何と言はれたんだい？　何か僕のことで？

グレーゲルス　まア來給へ。いろ〳〵話が有るからね。僕も行つて上衣を着て來やう。

廊下の戸口を出て行く。

ギイナ　貴方、彼の方と御一緒なら被行しやらない方が可いんですよ。

レリングゲ　うむ、行つちや不可ない。此處に殘つて居たまへ。

ヤルマア　（帽子と上衣を取つて、）なに、詰らない。子供の時からの友人が、何か内密で僕に打明ける必要に迫られて居るとすりや――

レリングゲ　何を馬鹿な――君には彼の男の苛々して氣狂ひ染みた容子が見えないのか。

ギイナ　貴方、聞えましたか。彼の方の阿母さんも時々あんな氣の狂つた

やうなことが有りましたよ。

ヤルマア　それなら愈々以て友人の監督が必要に成るね。（ギイナに向つて、）好い頃に晝飯の仕度をして置いてお呉れよ。では暫時失敬するよ。（廊下の戸口から出て行く。）

レリングゲ　あんな奴アヘエダルの山奥で、坑へでも落ッこちて往生しやア可いんだのに、斃死り損ひめが！

ギイナ　まア！　如何してそんな事を仰有るんですか。

レリングゲ　（咳きながら、）なに、私には理由が有るんですよ。

ギイナ　彼のヱルレエさんは本當に氣狂ひでせうか。

レリングゲ　いや、そんな事はない。普通の人間より餘計に間違つちや居ませんよ。だが、確に或病氣のために苦しんでは居る。

ギイナ　何處がお惡いんでせうね？

レリング　さア、何と言ひますかね、奥さん。彼の男は急性の形をした慢性の廉潔病のために苦しんで居るんですよ。

ギイナ　廉潔病？

ヘード井ッヒ　そんな病氣が有るんですか。

レリング　左樣です、これは國民的疾病ですよ。尤も只特發的に現れるだけですがね。（ギイナに向つて點頭く。）や、何うも御馳走でした。

廊下の戸口から出て行く。

ギイナ　（彼方此方と歩きながら、）うゝ、あのグレーゲルス、ヱルレエと云ふ方は——昔から怖（こは）い人だもの。

ヘード井ッヒ　（食卓の傍に立つて、自分の周圍を審かし相に見廻しながら、）何だか悉（みん）な皆變（な）だわねえ。

第四幕

ヤルマア　エーグダルの技術室

恰度寫眞が撮られたところ。黑い布を掛けた寫眞機、臺座、二脚の椅子、卓子、其他の物が室の中に置いてある。午後の光、日は將に沈まんとして居る。少時して漸次に暗く成り始める。

ギイナは手に小さな箱と濡れた硝子の板とを持ちながら、廊下の戸口に立つて、外の誰かと話をして居る。

ギイナ　はい、宜しう御座います。お約束を致した以上、確かで御座いますよ。最初の一打（ダス）は月曜日に出來て居ります。左樣（さやう）なら。（誰かの梯子段を降りて行く足音が聞える。ギイナは戸を閉めて、硝子板を箱に入れ、それを布の掛つた寫眞機の中に置く。）

ヘード井ッヒ　（臺所より入つて來る。）皆さんお歸りに成つて？

ギイナ（取片附けながら、）あゝ、漸と免れましたよ。

ヘードヰツヒ　阿父様は如何して未だお歸りがないでせうね。

ギイナ　若しかレリングさんの室にお坐ぢや有りませんか、階下の？

ヘードヰツヒ　いゝえ、お坐ぢや有りません。私今臺所の梯子を降りて訊いて來たのよ。

ギイナ　お午の仕度も冷えて仕舞ふだらうにねえ。

ヘードヰツヒ　えゝ、私本當に解らないわ。毎も御飯の時には齊然とお歸りに成るんだもの。

ギイナ　なに、最う間もなく歸つて見えますよ。

ヘードキツヒ　早く歸つて下さると可いわねえ。今日は何でも悉皆變よ。

ギイナ（聲を上げて喚ぶ。）あゝ歸つて歸つて見えた。

ヤルマア　エークダル廊下の戸口を入る。

ヘードヰツヒ（走り寄つて、）阿父様！　隨分長い間待つて居たのよ。

ギイナ（一目良人を見遣つて、）貴方、長くかゝりましたのねえ。

ヤルマア（妻の方を見ないで、）あゝ、些と長かつたかね。

外套を脱ぐ。ギイナとヘードヰツヒ傍へ行つて手傳はうとする。ヤルマアは手眞似で二人を去らせる。

ギイナ　お午御飯はヱルレエさんと御一緒にお濟しなさいましたでせうねえ。

ヤルマア（上衣を懸けながら、）いゝや。

ギイナ（厨の戸の方へ行きながら、）それぢや何か持つて參りませうね。

ヤルマア　いや、其儘にして置いて呉れ。私は何も喰べたくない。

ヘードヰツヒ（父の傍へ寄つて、）阿父様、何處かお惡いのですか。

ヤルマア　惡い？　あゝ、何うもね。グレーゲルスと一緒に無理をして歩

いたもんだから、可成疲勞れたよ。

ギイナ　そんな遠方へ被行しやらなければ可いのにね。貴方はそんな遠歩きには慣れないんですよ。

ヤルマア　ふむ、だが男は慣れて置かなきや不可ないものが、此世に澤山有るんだよ。（室の中を迂路つく。）私の留守に誰か來たかい。

ギイナ　あの若夫婦の外には誰方も見えませんよ。

ヤルマア　新しい注文もないのか。

ギイナ　今日は有りませんでした。

ヘード井ツヒ　阿父樣、明日は屹度有つてよ。

ヤルマア　何卒左樣有りたいね。俺も明日からは一生懸命に働く積りだからね。

ヘード井ツヒ　明日？　明日は何の日だと思つてらして？

ヤルマア　あゝ左樣だつたね、だが――うむ、それぢや明後日からに爲やう。今後私は何でも自分で爲るつもりだよ。悉皆一人で仕事を爲るよ。

ギイナ　貴方、そんな事をして何に成るのです？　只此世が詰らなく成るだけぢや有りませんか。寫眞の方は私で遣つて行けますよ。貴方は發明の仕事をつゞけて下さいましな。

ヘード井ツヒ　それに鴨のことも有るわ、阿父樣――それから牝雞だの、兎だの、それから――！

ヤルマア　そんな下らん事を俺に言つて呉れるな。明日から俺は二度と二たび屋根裏へ足を踏み入れないよ。

ヘード井ツヒ　だつて、阿父樣、明日は彼處でお祝ひをするんだつて、お約束したんぢやないの？

ヤルマア　ふむ。成程。それぢや明後日からでも可い。俺は彼の忌々しい

鴨の頸を捩ぢ千切つて遣りたい位に思つて居るよ！

ヘード井ッヒ　（叫ぶ。）鴨を！

ギイナ　そんな事を言ふ人が有りますもんか！

ヘードキッヒ　（父を搖振りながら、）いえいえ、阿父様――鴨は私の物ですよ！

ヤルマア　それだから俺は手を下さないのだよ。ヘードキッヒや、お前のために――俺は勇氣が出ないんだよ。だが俺の心の奥ぢや、如何しても手を下さなきや成らぬやうな氣がして居る。俺は此屋根の下に、一たび彼の男の手に有つた生物を容して置いちや成らんのだ。

ギイナ　如何してそんな事を言ふんです。お祖父さんが彼の呑んだくれのペッテルゼンに貰つてらしつたからですか。

ヤルマア　（迂路つき廻りながら、）そこに何か或要求が有るんだね――何と言

つて可いか――矢張『理想の要求』とでも言ふかな――つまり一種の義務なんだね。人間は自分の魂を傷けることなくして、此義務を捨てることは出來ない。

ヘード井ッヒ　（後から跟いて行つて、）ですが、あの鴨――可哀相に、彼の鴨のことも考へて遣つて下さいな。

ヤルマア　（立停る。）だから助けて遣ると言つてるぢやないか。俺は鴨の毛一本にも觸らないよ――と云ふのは助けて遣るんだよ。そんな事よりも、早速片附けなくちや成らぬ大問題が有るんだ。時にヘードキッヒや、お前最う平常の通り出掛けなきや不可ないよ。恰度好い位の薄暗がりに成つたからね。

ヘード井ッヒ　いえ、私は今日何だか出掛けたくないのよ。

ヤルマア　いや、お出掛け。最前からお前は眼をぱち〳〵させて居るやう

だよ。家の中の濕ッぽい空氣が、お前には好くないんだからね。何うも此家の空氣は重ッ苦しいよ。

ヘード井ッヒ　えゝ、それぢや私臺所の梯子を降りて、一寸散歩して來てよ。私の外套と帽子は？――あゝ、皆私の室に有りましたのね。阿父樣――私の居ない間に鴨を如何かしちやア可厭ですよ。

ヤルマア　頭の羽一枚にも觸りはせんよ。（娘を傍へ引寄せる。）お前と俺とだねえ、ヘードキッヒや――俺等二人だねえ――！　さア行つてお出で。

ヘード井ッヒ兩親に向つて點頭き、臺所を通つて出て行く。

ヤルマア　（上を見ずして歩き廻る、）ギイナや。

ギイナ　えゝ？

ヤルマア　明日から――でなきや明後日からでも可いが、私は此家の會計を自分で遣らうと思ふがね。

ギイナ　それぢや會計も御自分でお遣ん被成るんですか。

ヤルマア　あゝ、兎に角收入だけでも記けて置いて見やう。

ギイナ　何ですつて、そんな事なら譯有りませんわ。

ヤルマア　左樣でも有るまいよ。兎に角、お前はあれだけの金子で隨分長く遣つて行くやうだね。（立停つて、相手の顏を眺める。）如何してそんな事が出來るんだい？

ギイナ　私やヘードキッヒは、ほんの少許有りや可いんですからね。

ヤルマア　阿父さんはゼルレエさんの家の寫し物で、隨分好い報酬を貰つてお坐だと云ふが、左樣かい。

ギイナ　さア、それ程好い報酬か如何か知りませんね。私は彼樣云ふ仕事の値なんぞ知らないんですものね。

ヤルマア　で、幾許位貰つて居るんだい？　聞かしてお呉れな。

ギイナ　えゝ、時々變るんですよ。まア彼の人の生活費を拂つて、お小使が少許餘る位には成るでせうね。

ヤルマア　彼の人の生活費を拂つて――？　お前はそんな事一度も私に言はないぢやないか。

ギイナ　えゝ、それが言はうと思つても言へなかつたんですよ。貴方は何も彼もあの人の事を爲て上げて居ると思ひ込んで、あんなに喜んで被坐しやるんだものね。

ヤルマア　で、それは皆ゼルレエさんから貰ふんだね。

ギイナ　えゝ、左樣ですとも。彼の方はお金持ですからね。

ヤルマア　おい、洋燈を點けてお呉れよ。

ギイナ（洋燈を點けながら、）ですが、それがゼルレエさん御自身の手から出るか、それともグローベルクさんが――左樣して呉れるのか、私どもには

分りませんよ。

ヤルマア　何故そんな胡麻化すんだい？

ギイナ　私は知らないんですよ。只、左樣思つたから――

ヤルマア　ふむ！

ギイナ　お祖父さんに彼の仕事をお世話したのも、私ぢや有りませんよ。ベルタさんですよ。彼の女が好く自宅へ來い〳〵した時分に――

ヤルマア　何だかお前の聲は顫えてるね。

ギイナ（洋燈の笠を被せながら、）左樣ですか。

ヤルマア　それに手も震えてるよ、左樣ぢやないか。

ギイナ（斷乎として、）貴方、はつきり言つて下さいよ。彼の人は私のことを何と言つてたんですか。

ヤルマア　あれは本當かい――本當なのかい、あの――お前が彼處に奉公

して居た時分、お前とゼルレエさんとの間に、何か譯が有つたと云ふのは？

ギイナ　そんな事は有りませんよ。彼の時分にはないんです、ゼルレエさんが私の跡を跟け廻したと云ふのは本當ですが――そりやア私も白狀しますよ。それに、彼の奥樣がそれを何か譯でも有る樣に疑つて、やつさもつさの騷動も有りましたよ。それから奥樣も私を毆つたり追ひ廻したり爲さるので、私もお暇を頂いて出たのです。

ヤルマア　だが、それから後は？

ギイナ　えゝ、それから自宅へ歸りましたよ。それに阿母さんと云ふ人が――えゝ、あの人も貴方が考へて被坐しやるやうな女ぢや有りませんよ。私の側へ來ては、彼樣言つたり斯う言つたりして煩さく勸めるんですもの――其頃ゼルレエさんは鰥夫でしたからね。

ヤルマア　で、それから如何したい？

ギイナ　かう成りや、悉皆言つて仕舞つた方が可いんですね。彼の人は一度思ひ込んだが最後、如何かして念ひを晴らさなきや止めない人ですよ。

ヤルマア　（兩手を拍ちながら、）これが私の子供の母親か！　如何してお前はそれを私に隱して居たんだい？

ギイナ　私が惡う御座んした、私は最つと早く貴方に言はなきや成らんのでした。

ヤルマア　眞先に言はなきや成らんのだよ。左樣すりや、お前が何んな女だと云ふことも知れたんだ。

ギイナ　併しそれでも矢張私と夫婦に成つて下さいましたか。

ヤルマア　お前は如何してそんな事が言へるんだい？

ギイナ　それだから私は彼の當時貴方に何も言はなかつたのですよ。私はそれ程貴方のことを思つて居た。貴方に別れて憂い目を見ることは、迚も

私には出來ませんでした——

ヤルマア　（歩き廻る。）これがヘードキツヒの母か！　目の前に在る物は悉皆——（椅子を蹴る）——今迄自分の家ぢやと思つて居た物は悉皆——悉皆、先へ愛された男に借りて居たんだと思ふと——！　えゝッ、あの碌でなしのヱルレエめ！

ギイナ　それぢや貴方は私と夫婦に成つた十五年を後悔するんですか。

ヤルマア　お前は如何だ？　私の身の周りに虚偽の網を捲附けて置いて、毎日毎夜、別に後悔もしなかつたのか。それを言へ！　それを！　能く懺悔も悔恨も爲ずに居られたものだねえ。

ギイナ　ねえ、貴方、私はこれで家の事や日々の仕事で、いろ〳〵氣を遣ふことが有るんですからねえ。

ヤルマア　それぢやお前は過去を振回つても見ないと云ふんだね？

ギイナ　えゝ〳〵、私はそんな舊い事なんか大抵忘れて仕舞ひましたよ。

ヤルマア　あゝ、そんな白紙の様な無感覺の滿足！　それだけ聞いても、私は不快な氣がするよ。ま、考へて御覽——一度も後悔したおぼえがないと云ふやうな！

ギイナ　ですが、貴方、貴方は私の様な女房がなかつたら、今頃如何成つてると思つてらつしやるんですか。

ヤルマア　お前の様な——！

ギイナ　左樣です、貴方も知つてでせうが、私は貴方よりは些と實際的でも有れば、始終眼も開いて居ました。尤も、歳も一つや二つは上ですがね。

ヤルマア　私が如何成つて居るだらう！

ギイナ　初めてお目に懸つた時分は、隨分いろんな惡い事をおぼえて被坐した。貴方も左樣でないとは言へませんよ。